
IS **インフィニット・ストラトス** **の世界で整備士することになりました。**

てるまえ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス の世界で整備士することになりました。

【Nコード】

N8973T

【作者名】

てるまえ

【あらすじ】

IS インフィニット・ストラトス の世界に転生した主人公が整備士として会社にこき使われる話。原作には間接的に介入します。作者の気まぐれで原作キャラにフラグを立てるかもしれません。絶対に織斑ハレムは崩さないつもりです。処女作ですので文章力も低く、矛盾点も多く出てきたりというところと拙い部分がありますがあまり気にせずお読みください。また不定期更新となりますので更新についてはあまり期待しないでください。感想、誤字脱字報

告、叱咤激励については大歓迎です。

設定集（7月7日改訂）（前書き）

随時更新していきます。

設定集（7月7日改訂）

主要人物設定

山田 太郎

この小説の主人公で年齢は23歳、身長177？、髪の色は黒みがあった緑、目が悪いため黒のセルフレームのメガネを愛用している。転生者だがチート能力などは一切なく、容姿も贗冒目に見て中の下という評価。

転生の原因は不明でいつの間にか転生していた。

本人は寝ている間に心筋梗塞やらなんやらで死んだんじゃないかと予想してるが、真相は不明。

ちなみに心残りは第二次スパロボZをクリアできなかったこと。

前世は文系Fランク大学の学生であったがこの世界ではしっかりと勉強したため日本の最高学府を卒業し、前世ではうまくいってなかった就活も世界有数の企業に就職することができている。

原作に介入するつもりはないものの、前世ではロボアニメ好きのオタクで生粋のガノタだったためISは男のロマンだと思っており、この世界がISの世界だと知った時からISにはかかわろうと考えていた。

そのためか高校は俗に男が入学できるIS学園（IS学園は基本女子高であり男性はメカニック志望でも入学できない）と呼ばれる桐生学園（この作品オリジナル）を卒業しており、大学でもISを専攻している。

現在はアナハイム社、新人メカニックとして日々の仕事に追われている。

名前については作者のネーミングセンスがないためこれというものがないと悩んでたところ、小説家になろう様に登録するときに登録の説明文中に名前の例としてこれが載っていたから、これでもいいやと思ってこの名前になったという経歴がある。

容姿のイメージはパンプキン・シザーズのランデル・オーランド伍長の身長を低くし傷をなくし、髪の色を変え、メガネをかけさせたというイメージを作者は勝手に妄想しているが容姿のイメージが特に明確に決まっているわけではないので読者の方々が思い浮かべたイメージで読んでいただければOK。

実は裏設定として、原作キャラである山田 真耶とはいとこ同士である。

しかし、面識はあるものの2、3回ほど顔を合わせたことがある程度であり特に親しい間柄というわけではないのでマヤマヤは一夏の嫁というマヤマヤ党の方は一応安心してもらいたい。

サクラ・アナハイム

この小説の主人公その2でヒロイン？

年齢は15歳で日本人とのハーフ、腰まであるストレートの黒髪に父親譲りの淡いブルーの瞳、人形のような美貌が特徴、趣味は料理。スタイルは抜群で身長が150cm程度と小柄であることがさらに拍車をかけている。

カットインがあれば間違いなく揺れる。

ちなみにサクラ>箒である、何がとは言わないが。

アナハイムが誇る天才でISの権威、アナハイム社の製品にはほぼすべてに係わっている。

アナハイム社が発展したのはだいたい彼女のせい。

天才で美少女でIS適正A+と一見チートに見えるが、ISの操縦技術は経験が足りないため原作代表候補生には及ばず、素人に毛が生えた程度。

アナハイム社内でテストパイロットをしていた分、主人公補正のない一夏より多少強い程度である。

もつともISの相性が悪くほとんど勝ち目はないが。

また性格が邪気眼持ちの厨二病まったただ中で重度のアニメオタク。

本人いわく墮天使ルシフェルの使徒であるらしい。

彼女本人も自分が厨二病であると自覚していてこういう言動をしているためさらにタチが悪い。

飛び級で大学の博士号を取得したために同年代の友達ができることがなく、また大学では年上しかいなかったためアニメに逃げ、重度のアニオタになったという経緯がある。

邪気眼持ちの厨二病だが考え方は意外と常識的だったりする。

主人公とは兄妹当然に育っており、主人公のことは仕事時以外は「兄さん」と呼ぶ。

現在はアナハイム社極秘地下実験場に自分専用のラボを持っておりそこに住んでいる。

作品中に登場する前に名前と設定だけある程度5話の時点で書いてしまっていたため、キャラを作るのにかなり苦労した人物。

なんで性格に問題ありなんて書いてるんだよ俺は。

3人ほどキャラを作り、その中から悩みに悩んで決めた。

容姿は作者は俺妹の黒猫口調の東方プロジェクトのパチュリー・ノーレッジをイメージしている。

もちろんおっぱちゅりーである。

厨二口調のせいで、書けば書くほど作者の黒歴史がさらけ出されて

いるように感じ、心がストレスでマッハになる。
ガンダムを持っている人がいればぜひ貸していただきたい。

マイケル・アナハイム

アナハイム社の創設者であり現CEO。

短く刈った金髪と淡いブルーの瞳、まるでボディーガードのような
がっしりとした体格が特徴。

彼の堅実な経営手腕と娘のサクラ・アナハイムによってアナハイム
社が成り立っている。

日本人の妻がいたが病気ですでに亡くなっている。

近藤チーフ

本名 近藤 正明。

第一世代IS発表時からISのメカニックを担当していた、いわば
ISメカニックの第一人者。

その知識と経験は一級品でありG・01の製造に当たり、CEOMA
イケル・アナハイム自ら三顧の礼を持って引き抜いてきた。

主人公の上司に当たる。

ちなみに引き抜かれる前は倉持技研に所属していた。

ソフィア・ロード

IS学園の先生の一人。

イギリス出身。

担当はIS整備。

結って右肩にたらしたハニーブロンドの髪と深い青の瞳が特徴。
巨乳。

立ち振る舞いや口調がお嬢様じみているためいいとこの生まれではないかと主人公は予想している。

そのためメカニックというイメージがまったく似つかわしくない人物である。

意外と茶目つ気あり。

IS整備の授業では主に座学を担当し、実技は主人公が行うがため補助に回るが、実技が教えられないわけではなくメカニックとしての腕も高い。

その他設定

アナハイム社

5年前に現在のCEOであるマイケル・アナハイム氏が起業し、現在ではISのビーム兵器関連のシェア世界一を誇る企業。

外資系の企業だが本社はIS学園が日本にあることに合わせて日本にあるという珍しい企業である。

主力製品としてはIS用ビーム兵器が世界的に有名。

アナハイム社のビーム兵器には独自技術であるエネルギーCAPと呼ばれるバッテリーの一種を内蔵しておりIS本体からのエネルギー

―供給が基本的に必要ないという特徴がある。

これまでのISのビーム兵器はIS本体からのエネルギー供給によって運用されるものしかなく、またビーム兵器は非常にエネルギーを消費するため、強力ではあるが搭載したISは総じて燃費が悪く、実弾兵器が重宝される要因となっていた。

このエネルギーCAPを内蔵したことによりビーム兵器の燃費の悪さが一気に改善され、アナハイム社のビーム兵器が爆発的に普及こととなり、現在のビーム兵器関連のシェア世界一という地位を確立することとなった。

このエネルギーCAPを作る技術はアナハイム社が独占しており、他の企業はエネルギーCAPをコピーしようと躍起になっているものの、完全なブラックボックスとなっており未だにどのような原理が使われているかすらわかっていないこともシェア世界一という地位を確立するに至った要因となっている。

ビーム兵器関連以外にも、ISのパーツの製造販売やエネルギーCAPの技術を応用した、超大容量バッテリーの製造販売などを行っており、特にバッテリーについては現在急速にシェアを伸ばしている。

もちろん名前の由来は機動戦士ガンダムシリーズのアナハイム・エレクトロニクスから、ビーム兵器に強いという特徴もガンダム↓ビームライフル↓ビームに強くね？という安易な連想からきている。

説明文中に出てきたエネルギーCAPも元ネタは機動戦士ガンダムシリーズから。

ただしエネルギーCAPについては名前のみ、原理とかはでっち上げ。

ちなみにISの部品なんかは下請けとして作ったりするけれどもIS自体は作っていないから、今回が初。

これだけ長々設定を書いたけれどもあまり生かす機会はないかもしれない。

追記

ブルー・ティアーズに搭載されているレーザーライフルとアナハイム社のビームライフルは名前が違っただけで原理自体は同じものである。

ただアナハイム社のものだけはエネルギーCAPが搭載されているため、ほかの同原理エネルギーライフルと区別するためこのような名称をとっている、と設定しておきます。

なので基本的にビーム〜という名称のものはアナハイム製のもの、とこの小説内では設定します。

アナハイム社極秘地下実験場

アナハイム社の実験場。

だいたいここで試作品のテストが行われる。

機密のため正確な場所は社員ですら教えられず、本社ビルから専用のフルオートの地下鉄に乗って移動する。

また、距離や方角を割り出されないために1回ごとに経路が変わるという厳重なセキュリティを持つ。

所要時間も経路でまちまちのため社員は最低30分以上時間に余裕を持って移動しなければならないので不評を買っていたりする。

実験棟と研究棟の2つにわかれており、実験棟には東京ドーム1つに相当する巨大な実験場がある。

ちなみにサクラ・アナハイムはこの研究棟に専用のラボがあり、そこに住んでいる。

これは彼女自身が高名なIS研究の権威であり、彼女の研究データや彼女自身が他の企業や拳句の果てに他の国から狙われており、彼女に居場所を隠すためにこういった処置が取られている。

Gプロジェクト

アナハイム社初のI S製造プロジェクト。

目的は第3世代I Sの開発。

初のI S製造プロジェクトということで、G - 01に関してはI Sのコンセプトなどを社員から募集し、主人公のアイデアがたまたま選ばれた。

ちなみにGプロジェクトで開発されたI Sは必ずA I S G - 〇といふ形式番号が付く。

そのためG - 01の正式な形式番号はA I S G - 01。

ちなみに形式番号のAはアナハイムのこと。

G Mプロジェクト

量産型I S製造プロジェクト。

正式名称G M a s s p r o d u c t p r o j e c t (量産型Gプロジェクト)。

G - 01のデータをもとに本格量産機の製造を目的としている。

現在はデータ収集中なのでまだ構想段階程度のプロジェクト。

ウイングガンダムからジムができるとはこれいかに。

アニメ終了時点までエタラなかつたら再登場するだろうプロジェクト。

多分誰かの専用機としてジムが出てくることを構想中。

A I S G - 0 1 ウイング

アナハイム社が開発した初のI Sであり、第3世代機。

赤、白、青のトリコロールカラーのボディカラーと一对のウイングスラスターが特徴。

ぶつちやけI S版ウイングガンダム。

機動性の大半は背部ウイングスラスターにほぼ集約されておりウイングのパーツを稼働させることで停止から超音速域まで速度域を操作する事が出来る。

I Sでは初である変形機構を搭載しており、バード形態への変形が可能である。

機体のパーツのほぼ全てに最高品質の物が使用されており、性能は第3世代機でも最高クラス。

特に通常形態時の運動性とバード形態時の機動性は第4世代機である「白式」や「紅椿」に匹敵する。

また、実験機の意味合いを持っているので武装にも試験的なものが搭載されている。

完全にコスト度外視のワンオフ機で整備性が著しく低いため、専任のメカニックを付けてパーツの消耗をなるべく抑えるようにしている。

I S本体のエネルギーを使用する武装を搭載していないので、他の第3世代機と比べて遥かに燃費がよい。

バード形態

変形形態であり、機動性が大幅に上がる。

しかしながら、運動性が低下してしまい、武装も貧弱になるため、

基本的に奇襲時や高速移動の時に使われる。

武装

バスターライフル

ウイングのメインウエポン。

カートリッジタイプのエネルギーCAP「Eパック」を初めて搭載した携帯ビーム砲。

Eパックを3機搭載しておりEパック一つのエネルギー総量はIS一機分に相当する。

出力調整が可能で市販ビームライフル並みの出力から最大出力時にはEパック一つを消費して莫大な出力のビームを発射出来る。

そのため、最大出力時の弾数は3発。

最大出力時の威力は一撃でISのシールドエネルギーの8割近くを削るというISの武装でも最大級の威力を誇る。

これだけの威力を持ちながら、エネルギーは全てEパックで賄われており、IS本体のエネルギーを使わない。

そのため、搭乗者が許可を出せば他のISでも使用可能。

ただ、拡張領域の容量の大半を占めてしまっており、予備のビームサーベルと会わせると空き容量がなくなってしまう、砲身が巨大なため取りまわしが劣悪、最大出力時は撃つとき一瞬タメが入り、また撃っているときはその場から動けないといった弱点が存在する。

後にEパックは徹底的なコストダウンが図られて量産化、アナハイム社製ビームライフルに搭載され、ビームライフルの標準装備となった。

ちなみにバスターライフルに搭載されているEパックは後に量産されたものと比べて、かなり高性能である。

ビームサーベル

シールドの中に1機と拡張領域に1機の計2機搭載されている近接武器。

エネルギー刀身を形成して攻撃する。

白式の「零落白夜」に似ているが、性質は全く異なりエネルギーを消滅させることはできない。

刀身に重さが無くビームによって焼き切るため、刀身が重く、切るのにある程度技術が必要な実体剣と比べてかなりのアドバンテージを持つ。

エネルギーCAPを内蔵しておりIS本体からのエネルギー供給を必要しないが供給自体は可能。

後に量産されたものと比べて出力が高い。

追記

「実は、エネルギー刀身を持つ近接武器は零落白夜を除くとこれが初」という文言を削除。

原理はラウラのシュヴァルツェア・レーゲンに搭載されているプラズマ手刀に近い。

追記その2

アニメ8話内でプラズマ手刀と零落白夜が打ち合えている描写があるが、本小説内では不可能という設定としておきます。

ご都合主義になりますすがご了承お願いします。

また、原作小説内でそういった描写がある場合は随時変更させていただきます。

マシンキャノン

両肩に装備された実弾武器。

威力、速射性は十分であるが集弾率が低いという欠点を持つ。そのためもともと中々近距離での使用を想定していたが、中距離では牽制程度にしか使えず近距離以外ではダメージはほとんど期待出来ない。

また、両肩に装備されているので相手の方向にいちいち身体を向ける必要があるため使い勝手の悪さに拍車をかけている。

主力実弾武器として搭載していたが、牽制程度の補助火力としか使えなくなってしまった。

アナハイム社の実弾兵器のノウハウのなさが露呈してしまった部分と言える。

シールド

特殊合金製のシールド。

特別製の耐ビームコーティングがされているためエネルギー兵器に対する防御力も高い。

先端が鋭利なため刺突武器として使用できる。

変形時は機首となるため先端にセンサーが設置されている。

本編では基本的にG-01と呼ばれるためウイングとは呼ばれない
ある意味不遇な機体。

これは原作アニメ中、ウイングガンダムが一貫してガンダム01と呼ばれており、搭乗者のヒロでさえウイングガンダムと呼んだことが一度もないことのオマージュのつもり。

ちなみにウイングガンダムの名前で呼んだのはトレーズ様の一回切り。

一見チート機体に見えるが、結構弱点があり、総合的な機体性能で

は第4世代機には及ばない。

特に零落白夜によってエネルギー兵器が無効化されてしまう白式とは壊滅的に相性が悪い。

バスターライフルはおるかビームサーベルまで無効化されてしまうため、ダメージソースといえば近距離まで近づいてシールドで殴るか、マシンキャノンをはらまく以外方法がない。

そのため相手は当てれば一撃必殺なのにこっちは攻撃する為に相手の得意距離まで近づかなければならないというほぼムリゲー状態になる。

まともに勝つには白式のエネルギーが切れるまで逃げ回るしかないという…

これはひどい。

ジオニック社

IS実弾武器製造で世界シェア3位を誇る企業。

のちにM&Aによりアナハイム社に買収され傘下に入った。

これによってアナハイム社の実弾兵器製造技術が上がり、会社規模でも実弾、エネルギーを合わせたIS武器シェアで世界一の企業となった。

ちなみにジオニック社ではISそのものの製造はしていない。

もちろん元ネタは機動戦士ガンダムのジオニック社から。

アナハイム社がビームならジオニックは実弾じゃね？ という発想からできた企業。

多分今後本編に出てくることはほとんどない。

設定集（7月7日改訂）（後書き）

プラズマ手刀ってビームサーベルに近いものだと知った今日この頃。
そしてアニメ8話で零落白夜と打ち合えてるー！！
勉強不足でした。

ブローグ（前書き）

ブローグです。短いですがご容赦ください。

ブローグ

転生というものをご存じだろうか？

そう、よく二次創作なんかで題材となるあれだ。

かく言うも俺も趣味で二次創作よく読んでたからよく知っている。

神様のミスなんかで死んで、チート能力もらってアニメや漫画の世界でオレTUEEEEEEE！やらにこぼ・なでぽでハーレムやら、
そういった作品が調べれば山ほど出てくるし俺もよく妄想してた。

でも、これはあくまでもフィクションの中の話だ。

この現実世界では起きるはずはない。

———
そのはずだった。

1話

ppppppppppppp……

時計のアラームが鳴っている。

「……もう朝だよ」

はつきり言って寝足りないが、まあ仕方がない。

あと2時間で仕事に行かなきゃいかん。

とりあえずカーテンを開けよう。

外は雲ひとつない青空だった。

『目が覚めたら体が赤ん坊になっていた』

これが俺の経験した転生だ。

二次創作のように神様が出てきたわけでもないし、それ以前に死んだという記憶さえない。

就活が終わってくたくたになりながら下宿に帰り、ポストに面接の選考結果（不採用）が返ってきたから読んでがっくりとし、夕飯何にしようと考えてたらいつの間にか寝てしまい……

目が覚めたら（ry

ホント、こんな感じだった。

はっきり言ってマジで気が狂ったと思ってしまった。

あ、ありのまま（ryとポルナレフ状態になる余裕すらまったくなかった。

なぜなら、目を開けたら見たこともない女性が自分を覗き込んでいるのだ。

その時は本気で心臓が止まるかと思った。

——いやマジで止まったね、一瞬。

その後、あんた誰だっと思って思いつきり叫んだんだけど、

「アばうあばば」

口から出たのはこんな意味不明な言葉だった。

そのあとは体を動かそうにも動かず、暴れようにも暴れられず、パニックになり思いつきり泣いてしまい、そしたら口の中に何か突っ込まれ、わけもわからずそれをちゅうちゅう吸っているうちに落ちてきて……

自分がおっぱいを吸っていることにやっと気付いたのだった。

これが今から23年前のこと、俺こと山田太郎がこの世に生まれた日のことだった。

2話

ここはあるラノベに似た世界である。

そう確信したのが今から10年前、俺が中学生のころである。

はっきり言ってこれまで生きてきた24年間については特別なことは何もなかった。

前の人生と同じように友人とバカやつたりしながら小、中、高と進み大学に入り、前世ではできなかった就職をした。

ただ前世では文系だったけど今は理系で技術者になった、苦手だった英語が喋れるようになった。

俺自身の違いといえばそれ位である。

またこの世界自体も魔法が使えるとか、エルフがいるとかそういうったファンタジーの世界ではなく、普通に日本やアメリカ、ヨーロッパの国々等前世と変わりなく存在しているし宇宙にコロニーがあるわけでもない。

かといって超能力研究している学園都市とか、魔法先生がいるような某学園都市とか聖杯戦争が起きそうな都市や某白い悪魔のいるような都市もない。

もちろん歴史も前世とまったく同じだった。

とはいえここがアニメなんかの世界であるという予兆がなかったわけではない。

それが髪の色である。

この世界には前世ではありえない赤や緑、青といった髪の色の人間が普通にいる。

もちろん染めているという人もいるとは思う。

しかし、間違いなく地毛という人もいる。

そう、この俺自身だ。

俺の髪の色は黒みがかった緑である。山田太郎という履歴書の例文に書かれていそうなほどあまりにもありふれすぎて逆にネタになるぐらいの名前を持つ純粋な日本生まれ

の日本人なのに髪が緑である。

まだ茶髪、かろつじて金髪なら日本人にいるかもしれない。

でも緑である。

地毛で緑である。（大切なことなので二か（ry）

はっきり言つてこの時点で何かのアニメ、マンガの世界であるとは確信が持てた。

しかしながら何かの世界であるかは全くと言って解らなかった。

10年前、男女の社会的パワーバランスを一変させる兵器が世界で認知されることとなった事件、俗に言う「白騎士事件」が起きるまでは。

そうこの世界は所謂IS>インフィニット・ストラトス<の世界だったわけである。

3話

朝の通勤ラッシュですし詰め状態の電車に体を無理やりねじ込む。

濃密な人の臭いと湿気で気持ち悪くなってくる。

社会人となってもうすぐ2年になるがこれだけは慣れそうにない。

ああ、自由だった大学生活が恋しいぜ、まったく。

ISの世界に転生したからといって特にチート能力があるわけでもなければイケメンでもない。

もちろん転生した当初は転生オリ主キター！！なんて喜んで、何か能力があるのかなんか調べてみたりした。

もちろんそんな能力あるはずもなく、あるといえば大学で勉強さばりすぎて高校はおろか中学の問題すら解けるかどうかあいまいな頭ぐらいだった。

容姿も頑張った中の下ってところでむしろブサメンに入る。

両親は美男美女カップルなのにどうしてこうなった。

遺伝子仕事しろと言いたい。

また身長が高いかといえば177cmと何とも微妙なところだ。

せめて180cmにはいきたかった……

まあその分、勉強に集中でき、勉強の大切さを知ってたおかげでFラン大学だった前世と違い、この国で最高学府と言われている某T大を卒業できたり、英語ペラペラだったりするけど。

もちろん彼女なんてできなかった。

彼女なんてできなかった。

この世に神はいない（断言）

そもそも中学生になるまでこの世界がなんの世界かすら解らなかつ

たのである。

オリ主になろうなんざ都合のいい考えは小学生のころには捨てた。

そうとはいえISには係ろうとは思っていたのは事実である。

もちろん原作に介入するとかそういうものではない。

ISは男性が乗れなくてもある意味男のロマンの塊だ。

だってロボットだぞ。

空も飛べる、ビームも打てるロボットだぞ。

ロマンたっぷりじゃないか。

満員電車で20分すし詰めにされ、やっとのことで駅にたどり着く。

駅から出て真正面、まさに一等地にあるでかいビルこそ俺の就職した会社。

起業からわずか数年でISのビーム兵器関連のシェア世界一となった企業。

—— アナハイム社である。

いや、名前でマジ吹いたね最初。

4話

——アナハイム社

5年前に現在のCEOであるマイケル・アナハイム氏が起業し、現在ではISのビーム兵器関連のシェア世界一を誇る企業。外資系の企業だが本社はIS学園が日本にあることに合わせて日本にあるという珍しい企業である。

朝の朝礼も終わり、社員は自分の持ち場へと移動し始める。

さて、俺もさつさと移動するか。

「山田君、ちょっといいかね。」

急に呼び止められる。

部長の鈴木さんだ。

「部長、どうかしたんですか？」

「いやね、……あー、単刀直入に聞くけど君何か大きな失敗したかい？」

一瞬考えてみるが、特に大きな失敗をした記憶はない。

実のところ俺はかなり大きなプロジェクトのメンバーの一員である。はつきり言ってアナハイム社の今後の命運が掛っているといっても過言じゃないほどだ。

ちなみに一年目からこれだけ大きなプロジェクトを任されているのは、すべての社員にプロジェクトのアイデアを募り、たまたま自分のものが採用されたというのが理由である。

「いえ、心当たりはないですが？」

「そうか……」

そう言って部長は首をかしげている。

「なにかあつたんですか？」

はつきり言って心当たりは全くない。

そんな部長の様子を見ているとかなり不安になってくる。

部長は少し考え込んだ後、口を開いた。

「……うちのボスがお呼びだ、お前を名指しで」

「…………え？」

何を言っているのかわからなかった。

ボス？

うちのCEOのことだよな。

「やっぱり心当たりないよな」

部長もさっぱり見当がつかないみたいだ。

はつきり言って入社今年で2年目の社員が名指しでCEOに呼ばれるなんて異例中の異例だ。

あるとしたら、犯罪を犯して懲戒免職なんかの時くらいだろう。

「はつきり言ってプロジェクトに関しては今のところ順調そのものだ。呼びつけられる失敗なんて今のところない。そもそも失敗で呼びつけられるなら俺にも責任がかかってくる。お前一人で呼びつけられることなんてないはずなんだが…」

部長はそう言う。

もう一度考えてみるが心当たりはない。

「とりあえず行ってみてくれ。社長室だ。」

かなり不安だが、解らないことを考えても仕方がない。

部長に了解を告げて、社長室に向かうことにした。

「山田太郎さんですね。CEOが中でお待ちです」

このバカでかいビルの最上階、社長室の前でそう言われる。

どうやらこの人が秘書さんみたいだ。

秘書に連れられ社長室の中へと入る。

中では一人の男性が書類をかたずけていた。

短く刈られた金髪に淡いブルーの瞳、どこぞのボディーガードと間

違えられるほどがっちりとした体格。

起業してわずか5年でアナハイムを世界的大企業へと成長させた稀代の経営者。

現CEO、マイケル・アナハイムがそこにいた。

5 話

「…座りたまえ」

秘書に連れられて部屋の中心にあるソファアの隣まで来た俺にCEOはそう言う。

失礼しますと、そう言ってソファアに腰掛ける。

まるで体が包み込まれたかのような座り心地、さすが社長室といふべきか、かなりいいソファアだ。

CEOは秘書に軽く合図をすると目の前のソファアに腰を掛けた。

合図を見て秘書は音もたてず退室する。

どうやら一対一の話のようだ。

普通ならかなり緊張する状況だが、俺はほとんど緊張していなかった。

もちろん不安は感じていたが。

「君をここに呼んだ理由はもちろんGプロジェクトのことだ」

CEOはそう話し始める。

『Gプロジェクト』

俺が現在係っているプロジェクトであり、わが社の命運がかかっているといっても過言ではないプロジェクト。

わが社初のIS製造プロジェクトである。

とはいえGプロジェクトでまずいことをやらかした記憶は全くない。

「あー、そう不安がらなくていい。計画は順調そのものだ」

どうやら不安が顔に出ていたようだ。

「…ではCEO、私にいったいどんな用件でしょうか？」

そう問いかける。

はっきり言って全く見当がつかない。

「要件というのは…」

そう言っただけ、CEOは口をつぐむ。

そんなに話にくいことなんだろうか。

「あー!!!話にくい。まあ半分は私用みたいなものだからいつも

通りの話し方でしゃべらせてもらっぞ、タロー君。君にCEO扱いで話しかけるとむずかゆくて仕方がない。全く慣れないことをするんじゃないな。タロー君もいつも通りマイク小父さんとして喋ってくれ」

そう、俺がCEO相手にあまり緊張しなかった理由ははっきり言ってこの人とは親しい間柄だからだ。

知り合ったきっかけはたまたま家が隣であり、小さなころからかわいがってもらっていたからである。

俗に言うご近所さんだったわけだ。

「最後に会ったのは入社式だったかな。…小さかったタロー君がこんなに立派な大人になるとは。全く感慨深いものだな」

はっきり言って照れくさい。

実のところ小父さんがこの会社のCEOだということは、最終面接で顔を合わせるまで知らなかった。

なぜなら、小父さんはもともと恥ずかしがり家な上、マスコミ嫌いなため、ほとんど表に顔を出さないからである。

はっきり言って名前は知ってるけど顔を知らないという人が世間一般ではほとんどではないだろうか。

ちなみに自分の名誉のため言っておくが縁故採用じゃないぞ。

小父さん曰く、わが社の優秀な人事スタッフがしっかりと精査して

採用したのだから胸を張っていいとのことだ。

また、もともと親しい間柄だということもあり、あらぬ誤解を招かないよう会社内では必要最低限の接触にとどめており、また例え会ったとしてもそこはCEOと社員、きつちりと分別はつけている。

まあ、実際のところほとんど会うことはないのだが。

それから少し雑談をしていたのだが、小父さんの顔がCEOとしてのそれになる。

どうやらここからが仕事の話のようだ。

「私の娘が今年からIS学園に入学することはタロー君も知っているだろう。先日、Gプロジェクトの1号機であるG-01がロールアウトしたとことから、娘にはG-01のテストパイロットとしてIS学園でデータを収集してもらいたいと考えている」

「...ということはつまり俺にIS学園に出向しろということですね」

「察しがよくて助かる。タロー君には専属メカニックとして出向してもらいたい」

「どうやらビンゴのようだ。」

はつきり言えばIS学園にはいきたくない。

なぜなら先日あるニュースが発表され、世界が震撼するという出来事が起こっている。

そう、『世界で唯一ISを使える男』が発見されたのだ。

つまり、織斑 一夏がIS学園に今年入学するということ。

原作開始ということである。

行きたくねー!!

これってあれだろ、行ったら原作に係るかもしれないってことだろ。いやもうホントマジで勘弁してください。

平凡な生活させてください（切実）

「…ちなみに断ったらどうなりますか？」

ダメもとで聞いてみる。

「別にどうってことないさ。……『今年からの君の生活がほんの少し苦しくなる』それだけさ」

いい笑顔で返された。

はい、拒否権はないってことですね。

わかります。

／（＾０＾）＼ナンテコッタイ

小父さんは冗談だとカラカラ笑っていたがあれはマジの目だ。

断れば給料が悲しいことになるのは間違いない。

「…実のところ娘が心配なのだよ。はっきり言ってあの子は天才だ。だからこそうまくなじめないかもしれない。加えてあの子はあの性格だ。心配にもなるさ」

軽く笑いながらも小父さんはそう言った。

サクラ・アナハイム

わずか13歳で大学の博士号を取得した天才であり、あの大天災（誤字にあらず）篠ノ之 束に次ぐ天才ともいわれるISの権威。

博士号を取る以前からわが社の製品の基礎理論から設計まで幅広い分野でかかわっており、経営者の父とともにわが社になくてはならない存在。

まるで人形と見間違うほど恐ろしく整った美貌に小柄だが15歳とは思えないほど抜群のスタイル。

拳句の果てには原作キャラの一人であるイギリスの代表候補生、セリシア・オルコットに並ぶIS適正A+をたたき出している。

まさに天が二物どころか三物も四物も与えたような、生けるチートキャラともいえる人物である。

…そう性格以外は。

「その点、タロー君くんは付き合いも長いし、信頼もおける。何よりタロー君のことは気に入ってるみたいだね。もちろんボディー

ガードも付けるが娘のことは解ってもらえないだろう。親馬鹿なのかもしれないがよろしくお願いできないだろうか」

と言つて小父さんは頭を下げた。

確かに俺と彼女の付き合いは長い。

ほとんど兄妹みたいなものだ。

そして小父さんに頭を下げられてまで頼まれては断ることなんてできない。

「……解りました。お受けします」

俺はそう答えたのだった。

5 話（後書き）

1 話 1 話が短いとのご指摘がありましたので、少し文字数を増やしてみました。

ご指摘のほうありがとうございました。

かさねがさね御礼申し上げます。

6話（前書き）

ガンダム新作発表決定 ↓ テンションあがる ↓ 新しい情報が入る ↓ さ
らにテンションあがる ↓ コロコロ原作、敵宇宙人 ↓ ガンダム？ ↓
Orz ↑ 今ココ。

6話

社長室から出て自分の持ち場へと向かう。

この後はロールアウトしたG - 01の試験運用に参加しなければならない。

実のところ専属メカニックの仕事を受けてしまったがかなり不安である。

なぜなら、自分はまだ社会人になってまだ2年目にすらなっていないひよっこメカニックだ。

腕はそれなりにあるとは自負しているが専属メカニックに足るような腕を持っていると自信を持つてはいえない。

もちろん経験なんて足りなすぎる。

小父さんは専属メカニックに足る實力を持っていると言ってくれたが、それでも自分で本当にいいのかという気持ち強い。

実際のところISには自己修復機能が備わっており、基本的にはある程度メンテナンスフリーである。

もちろんそれも限界があり大破したらパーツ交換が必要となってくるし、メンテナンスフリーとはいえない

日々のチェックは必要不可欠である。

そういつ点でいえばメカニックは腕がいいほどよいのは当たり前なのだ。

そんなことを考えていると、どうやら目的地に着いたようだ。

『アナハイム社極秘地下実験場』

正確な場所は社員ですら秘密であり、本社ビルから専用のフルオート地下鉄に乗って移動する。

その上、毎回地下鉄の経路が変わるという念の入れようだ。

専用駅に降りるとすぐロッカールームに向かい、作業着に着替える。

そして、実験施設に向かう。

カードキーを通し、指紋認証、さらに網膜認証と、厳重なロックを解除すると扉が軽い音を立てて開かれる。

「おつ、山田。やつときたみてえだな」

いきなり声をかけられる。

チーフメカニックの近藤さんだ。

どうやら実験は小休止に入っているみたいだ。

「おはようございます、近藤チーフ。遅れてすみませんでした」

「いいってことよ。ボスからの呼び出しだろ。……それと、聞いたぜ。お前あのカワイコちゃんの専属メカニックに選ばれたってな」

近藤チーフは快活に笑いながらそう言う。

ちなみにカワイコちゃんとはG-01のことだ。

「ええ、……まあ、そうです」

「カーッ!! うらやましいぜお前。あんなカワイコちゃんの世話ができるなんてよ」

今話している近藤チーフは第一世代ISが発表された時からISのメカニックを担当している、いわばISメカニックの第一人者だ。

そのメカニックの腕とISの知識はずば抜けており、わが社がIS

を製造するにあたって、熱烈なラブコールを掛けわざわざ引き抜いてきたほどだ。

俺にＩＳメカニックのいろはを叩き込んでくれた、師匠ともいえる人であり、メカニックとして一番尊敬し、目標にしている人である。実のところ今回の専属メカニックの件も近藤チーフが一番適任じゃないかと思っている。

娘のことを考えると小父さんの気持ちもわかるがやっぱり会社のことを考えると近藤チーフのほうが適任じゃ……………

「おい、山田ア。ちょっと齒アくいしばれや」

「…………へ？」

そんな間抜けな声を出しながら、近藤チーフのほうをむく。

バキツという音ともに思いつきりブツ飛ばされる。

それに遅れて痛みと口の中に広がる血の味。

…え？ 一体何が起こった？ 殴られた？

「おめエはウダウダ考えすぎなんだよ！！…………どうせ専属メカニックの話俺のほうがふさわしいとか何とか考えてたろうがあ」

「えっ、何でそのことを…」

「てめえのしみったれた顔見りゃあ一年かそこらの付き合いでも嫌

でもわかるわー!!」

どうやら思いっきり顔に出てたみたいだ。

「……つたく、てめえはまだひよつこだがこの一年オレが徹底的に技術を叩き込んだんだ。腕はオレが保障してやる。それになあ、おめえこんな力ワイコちゃん相手に経験つめんだ。こんな機会二度と来るかわかんねえ。逃したら勿体ねえだろうが」

確かにそうだ。

こんな機会めつたにない。

「それにな、おめえはこの仕事受けるって決めたんだろ。だったらウダウダ考えてねえでさっさと腹くくれや。そんでもって誰にも文句言わせねえ様な結果出しゃあいだけだろ」

……あー、どうやら本気で心配を掛けてしまったみたいだ。

ホント、ダメなやつだな俺って。

「……ちったあい顔できるようになったじゃねえか」

近藤チーフはニヤリと笑いながら言う。

「心配かけました。ありがとうございます」

こっちもニヤリと笑って返す。

「……別に、心配なんざしてねえよ」

近藤チーフは後ろを向きながらそう言った。

どうやら照れてるらしい。

周りからもチーフ、ツンデレきもーいとかいう声が上がって…

ってみんな見てたのかよ。

うわ、めっちゃ恥ずかしい。

「てめえら!! さっさと持ち場に戻りやがれ!! 山田あ、さっさとカワイコちゃんのとこ行くぞ!!」

近藤チーフはそう言って走り出す。

とりあえず、さっさと向かうことにしよう。

ここにいると恥ずかしすぎる。

俺は逃げるように格納庫に向かった。

格納庫内では様々なスタッフが次の実験の準備のためせわしなく動いている。

どうやらそろそろインターバルが終わり次の実験が始まるようだ。

「山田あ、オレはシステムの確認すつから、おめえはあのカワイコちゃんに異常ねえか軽く目視確認して来い。多分ねえとは思うがそれでも氣い抜くんじゃねえぞ」

近藤チーフはそう言ってシステムチェックをし始める。

俺もチェックのためにISのほうへ向かう。

格納庫の中心に鎮座している赤、白、青のトリコロールカラーを基調とし、一対のウイングユニットが

特徴的なISこそわが社初のISであり、第3世代IS。

形式番号 A I S G - 0 1 『ウイング』である。

まあ、ぶっちゃけた話、IS版ウイングガンダムである。

ちなみにこの世界にはガンダムシリーズの作品はすべて存在しない。

どうやら原作者である富野由悠季御大がそもそもこの世界のアニメ業界には存在していないらしい。

前世では重度のガノタだったため、これを知った時の俺の絶望度合いは半端なかった。

まあ、そのおかげでこのISが製造できたわけだから結果オーライってところだろう。

もちろんこのアイデアを出したのは俺である。

といつてもわが社初のISということでそのコンセプトのアイデアをすべての社員から募集したところたまたま俺のアイデアが採用されただけである。

アイデア自体はまんまウイングガンダムであるため、武装はバスターライフルにビームサーベルにマシンキャノン、それに変形機構も実装されているため、バード形態への変形も可能とまさにそのままである。

よくここまで再現できたとわが社の小さな天才と技術者たちのすごさをまざまざと思い知らされたこと

は自分の中でも記憶に新しい。

ちなみに余談ではあるが変形機構を有した世界初のISであるとのこと。

とりあえず、G-01の確認を始めよう。

装甲や稼働部など目で見える部分をしっかりと確認する。

気をつけなければならないのは、装甲の微かな変形や稼働部の部品に異常がないかだ。

通常、ISは自己修復をするため基本的にはメンテナンスフリーである。

しかしながらごく稀に、うまく自己修復しないということがある。

まあ簡単にいえば怪我をした時、痕が残ってしまうことがあるのと同じことだ。

これが起きると装甲に凹凸ができるなど変形して修復されてしまう、なんてことが起こる。

特にひどい場合は他の部分と癒着してしまうなんて事例も起きている。

これが装甲同士の稼働部や関節部で起きてしまうとスムーズに動かなくなったり、ひどい時には全く

動かせなくなってしまうのだ。

もちろんIS自体にも異常をチェックするシステムが搭載されてい

る。

しかしながらこれにも限界があり、すべての異常がチェックできるわけではないのだ。

そのためこういった目視確認は、異常を起さないためにも重要なことなのだ。

あまり時間をかけないようにしながらも、的確にチェックを行っていく。

特に背部のウイングスラスタはこいつの機動性の要だ。

特に気を使って確認しないとな。

……………特にこれといった異常はないようだ。

最終確認にISのチェックシステムを起動させる。

—— オールグリーン。

これでチェック終了だ。

「チーフ、こっちは異常なしです」

「よっしゃ、こっちも異常なしだ。そんじゃ、ウチのお嬢を呼んで来い。研究室のほうでデータまとめてると思うから」

どうやらチーフのほうにも異常はないようだ。

俺は了解と返事をして研究室に向かった。

研究棟の長い廊下を歩く。

いくつもの研究室が並んでいるその最奥がG - 01のテストパイロ

ットである彼女、サクラ・アナハイムの研究ラボだ。

カードキーにパスワード、指紋認証、網膜認証とセキュリティーを外し、中に入る。

いちいちセキュリティーがめんどくさいが、わが社の最高機密が集まった場所なので仕方がない。

中に入るとまず議論用のオープンフロアがあるのだが、そこには人影はない。

どうやら自分のラボにいるようだ。

オープンフロアを通り、そのさらに奥の扉に向かう。

ここから先は社長であるマイク小父さんすら自由に入れない場所だ。

まあ、その理由はラボでありながらサクラ個人の居住スペースだからなのだが。

例えば父親であっても自分の部屋に勝手にはいられたくないってことだろう。

というわけで、扉の横に設置されたインターホンを押す。

「次の実験準備できたから、呼びに来たぞ。」

俺はインターホンに話しかける。

少し待っていてという返事の後30秒ほどで軽い音とともに扉が開

く。

腰ほどの長さのストレートの黒髪に、マイク小父さん譲りの淡いブルーの瞳、そして人形のような美貌。

ISスーツの上に白衣を羽織った格好の美少女こそわが社が誇る天才、サクラ・アナハイムだ。

「どうだ、実験の調子は？」

試験場に戻りながらサクラに尋ねる。

「上々ね。今のところほぼ予想スペック通りの数値が出ているわ」

150cmあるかないかという小柄な体格なため、こちらを見上げながら言う。

しかし、予想スペック通りか。

そうなると現行第三世代ISの中でも最高クラスの性能を持つことになる。

「……すさまじいな、普通初のIS製作で作り出せるような性能じゃない」

今までISを製造したことがなかった企業がいきなり世界最高レベルのISを作り出したのだ。

他のISを製造している企業にとっては悪夢に違いない。

「当たり前よ。この私が係っているのだから、ただの人間が作ったISに負ける理由はないわ」

さすがわが社が誇る天才、言うことが違う。

それにしても、ISスーツ姿がけしからん。

ホントに15歳かと思う位スタイルがいいからな、小柄なくせに。

一歩歩くことに揺れるのだ、たゆんたゆんと。

何というか、こう右手を上げ下げしたくなってくる。

「どこを見ているのかしら、この変態」

思いつきり睨みつけられた。

だってそんなに揺れてたら見ちゃうだろ、男なら。

仕方ないね。

うん、仕方ない。

「まあいいわ。……そんなことより、兄さんがあれの専属メカニックになった話は本当かしら？」

ちなみにサクラは俺のことを昔から兄さんと呼ぶ。

兄妹みたいな関係だったからそう呼ばれているだけだ。

「本当だ」

そう答える。

「……メカニックとしてならチーフのほうに適任だと思うのだけど」

「俺もそう思ったさ。まあ、小父さんがお前のことを心配して気心が知れている俺に頼んだってわけだ」

「……余計なことしてくれるわね、お父様も」

だってなあ、そりゃ心配になるさ。

「堕天使ルシフェルの使徒たるこの私が心配されるようなことを起

すとも思っているのかしら」

こんなこと言ってるやな。

そうわが社が誇る天才美少女は厨二病まっただなかの邪気眼持ちなのである。

6 話（後書き）

たゆんたゆんしてたら仕方ない。

7話（改訂版）

えー、この作品を見ていらっしゃる読者の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

私こと山田太郎は元気にIS学園に向かっております。

……えっ、メタな発言するなって？

仕方ねーだろ、現実逃避ぐらいさせてくれ！！

どうしてこうなった。

どうしてこうなった。

というわけで回想スタート。

——起動実験からはや三日、IS学園の入学式まであと一週間である。

結果から言つと実験はおおむねうまくいった。

ただ、マシンキャノンの性能だけは如何ともしがたいものだったけど。

これから改善していかなければならない部分ねとサクラも言っていたので、改善点が見つかったという意味ではよかったと思う。

これからISの量産機の製造を目指すアナハイムとしては実弾系統の武器の技術が劣っているという弱点は克服していかなければならないものである。

実際にこれを克服するため、実弾兵器を取り扱っている他の企業へのM & Aがもう始まっているらしい。

噂だと、業界3位のジオニック社だとか。

ちなみにその後、G - 01は第3世代機でも最高クラスのISとして正式に世間に情報が公開された。

その時の市場は他のIS製造企業の株価が軒並み下がり、わが社の株価はストップ高になる等すさまじい状態だったとのこと。

実験終了後は俺は通常業務をこなしながら、自分のデスクの整理をしている。

所謂、転勤の準備だ。

まだ正式な辞令が下りていないから転勤地は正確には解らないものの、多分IS学園に最も近い営業所になるだろうと考えている。

住んでいる社員寮のほうの片づけも8割方終わって、転勤前に生活必需品を片づけるのみだ。

ちなみに今回の俺の転勤は特例的なもので、たいていは転勤する大體1カ月前には辞令が下りる。

このせいで人事部はてんやわんやなこととなったとそのこの部署の同期のやつに飲み会で散々愚痴られた。

ただでさえ忙しい年度末だから非常に申し訳なく感じたが、それは小父さんに言ってくれ。

あと、絡んでくるな、酒臭い。

というわけで本日の勤務終了後、やっと辞令が下りたんだが……

辞令

○ □×年3月31日付で3年間、あなたを当社専属メカニックおよび特別講師としてIS学園への出向を命ずる。

(。 ㏽)

(つ ㏽) ゴシゴシ

当社専属メカニックおよび特別講師として……

(。; ㏽)

(つ ㏽) ゴシゴシ

特別講師として……

| , | .

(; ㏽) ……?!

(。 ㏽)

(。 ㏽)

。 。

/ / ポーン!

(㏽)

ちょwwwおまwww聞wいwてwねwえwぞ。

特w別w講w師wとwかwww。

……笑うしかなかった。

というわけで私こと山田太郎は専属メカニック兼特別講師、つまり先生としてIS学園へ出向することと相成ったのだった。

誰が変わってくれ、イヤもうマジで。

そんなこんなのがあり気分は憂鬱だ。

まさか特別講師をやるハメになるとは……

そこのチートオリ主ならオレTUEEEEとか原作キャラにフラグ立てるぜとかでいけるんだろうけど、俺は専属メカニックだけとただの会社員だぞ。

原作に巻き込まれたら間違いなく死ねる。

しかも特別講師だから、立場は教師と同じ。

巻き込まれる確率上がったじゃねえか。

怨むぞ、小父さん。

まあ、立場上教師と同じだから教員用の寮に住める分新しくマンションとか探す必要がなくなったし、何よりIS学園にある各国のISを合法的にさわれるのだ。

これはメカニックとしてはかなりオイシイし、楽しみでもある。

それに人にものを教えられるということは自分が完璧に理解できているということでもある。

メカニックとしてさらに腕を上げるには絶好の修行場であるのだ。

……そう思わにゃ、やっとなん。

「そんな辛気臭い顔をしてくだらないことを考えるのをやめてほしいわね、兄さん。こっちまで気が滅入ってくるわ」

隣に座っていたサクラが辛らつな言葉をかけてくる。

ちなみにサクラと一緒にIS学園に向かっているのは寮に入るため

だ。

IS学園は基本全寮制であるため、入学式の一週間前には入寮が始される。

もちろん入学式当日でもいいのだが、俺がIS学園に向かうということだけで一緒に行くことになったのだ。

同じく俺もIS学園に向かう理由は職員寮に入るためである。

これは学園についてのガイダンスもあることから教職員は最低入学式三日前には入寮しなければならぬからだ。

まあ、実際のところ俺のついでにサクラがというよりむしろ俺がついでになっている。

サクラは世界的なISの権威であるためその知識は世界各国の企業や国々からしてみればのどから手が出るほど欲しいものである。

つまり世界の国々や企業から狙われているのだ。

事実、誘拐未遂が何度か起きており俺も一度巻き込まれたことがある。

その時は白昼堂々いきなりサクラを車に引き込もうとしてきたから、何とか阻止して逃げたら、追ってくるわ、ナイフ切りつけてくるわ、銃で撃ってくるわではつきり言って死ぬかと思った。

幸いだったのは護衛の人たちが近くで見張っていたためすぐ鎮圧できたことだ。

ちなみに犯人グループは護衛が出てきたらすぐに逃走し、その後捕まりそうになった時車ごと自爆したらしい。

そういうわけで基本的にサクラには護衛が就いており、今のっている車もサクラのための護衛車に乗せてもらっているというわけだ。

「くだらないことを考えているのなら少し手伝ってほしいのだけど」とサクラはパソコンのウィンドウを空中に開きながら言う。

ちなみにこの世界のパソコンは前世より格段に発達しており、空中にウィンドウやキーボードを出すことができるレベルだ。

えーとなになに？

IS量産化計画について……

「今度作るとか言ってた量産機のやつか。いいのかこんなの俺に見せて？」

これ多分機密文書だろ。

俺みたいな平社員が見ていいのか？

「いいのよ。まだ計画段階のものだから。それにほとんど白紙みたいなものだから見せても大して問題にならないわ」

そういうものか。

「基本的にG - 01を基にした機体になるわ。だから今聞きたいのはG - 01のメカニックとしての評価よ。それで専属メカニックさん、どうかしらG - 01は?」

G - 01ねえ。

俺は手早く考えをまとめる。

「私見だけど、あれはメカニック泣かせの機体だな。はっきり言って打鉄やラファールなんかよりはるかに整備がしにくい」

「理由は?」

「変形機構のせいか部品の数が多すぎて構造が複雑だということと特注パーツが多いからパーツが入手しにくいことだな」

そう、G - 01の整備のしにくさははっきり言って専属のメカニックじゃない初見のメカニックじゃ無理じゃないかなと思うほどだ。

だから専属メカニックを置いているんだろうけど。

「ならメカニックが一番いいと思う機体はなにかしら?」

とサクラは俺に問いかける。

「そうだな……これも私見だけどパーツが手に入りやすくてかつ加工しやすくてかつ総数なるべく少なくてかつ構造が単純な機体だな」

まあ、あくまで整備がしやすい機体であってそう性能が高いもので

はないだろうけど。

「そう、一応参考になったわ。」

そう言ってパソコンをしまう。

それから何分か他愛もない話をしてっていると乗っている車が止まった。

どうやらIS学園にいたようだ。

ふと、ポケットで携帯が鳴っていることに気付く。

サクラに車から先に出ているように言っただけ電話をとる。

近藤チーフからだ。

「おい!! そっちは無事か!!」

携帯に出た途端大声で聞いてくる。

雑音がかなり騒がしいので何か起こったみたいだ。

「こっちは無事です。IS学園内に入りました」

そう伝えると携帯の向こうから安堵の声が聞こえてくる。

「……もしかして襲撃を受けました?」

「ああ、襲撃を受けて輸送中のG-01が奪取された」

サクラがIS学園に入寮するということで今日は同時にG・01の輸送も行っている。

近藤チーフはそちらに係わっていたのだ。

「情報がやっぱり漏れてたみたいですね。……見事にひつかかるなんて」

「そうみてえだな。こりゃスパイがいるな」

ちなみにこのIS輸送隊はかなり大掛かりだが完全な囷である。

本物は待機状態にしてサクラの首にネックレスとして掛かっている。

つまりあらかじめ社内に偽の情報を流しておいたのだ。

その情報が漏れたとなると、社内にスパイがいることになる。

「天下の公道で白昼堂々、打鉄5機も投入してきやがった。」

おいおい、国際IS委員会の監視が特に厳しい我が国でISを使うとは……

特定されない自信でもあるんだろうか？

多分あるからこういった犯行に及んだのだろうけど。

「ISを5機も投入とは相手さんも大判振る舞いですね」

「5機も投入できるってことは、よっぽどの大企業か国家レベルで

動いているかまあそんなところだろうぜ。打鉄を使ってるからどこ
どいつだかは機体だけじゃ特定できねえが…。まあオレが言いたい
のはそっちも気をつけろって言うこった。IS学園内まで襲撃する
ほど奴さんたちもバカではないだろうがな」

5機もISを投入ししかも国際IS委員会に特定されない自信があ
るということはチーフの言った通り、大企業、国家レベルだろう。

そうなると捕まる可能性は低いな。

賄賂とか圧力をかけることは絶対にやってくるだろう。

手口が派手だから亡国機業ではないと思いたい。
ファントム・タスク

「一応、肝に命じときますよ」

それから2、3つ話して電話を切る。

まあ、肝に命じとくと言っても俺ができることはほとんどないし、
サクラにはISもあるからむしろ守られるほうかもしれんな。

「……兄さん、さっきの電話は？」

車から降りるとサクラが話しかけてくる。

下手に話して不安にさせる必要もないから無事に着いたのかという
確認の電話だと言っておく。

「……そう」

とだけサクラは言う。

……こりや多分気付いてるな。

周りの護衛の雰囲気も緊張感のあるものに変ってるし。

「まあそんなに不安がるなって、もうIS学園の中だから襲ってくるようなバカはいねーさ」

頭をポンポンと軽く叩いてそういう。

「別に不安になってなんかないわ。このルシフェルの使徒たるこの私とその程度で不安になるとでもおもう？……それと頭をたたかないで頂戴、この私の頭脳がバカになったらどうするつもりなのかしら」

思いつきり睨まれた。

はいはいルシフェルの使徒（笑）ルシフェルの使徒（笑）

ってかホント可愛くねーな。

まあそんなこんなでいろいろと波乱もあったがとりあえず入寮手続きをするためにサクラとIS学園に向かうことにした。

7話（改訂版）（後書き）

打鉄は日本の自衛隊しか使っていないと書いた部分を改訂させていただきました。

打鉄は世界各国の企業や軍で採用されているとのことですが、作者の勉強不足でした。

読者の方々にはご迷惑をかけてしまい申し訳ありません。

8話 Side 太郎

サクラと別れてから理事長室に向かい出向届の受理を受けた後、俺は学園の案内と説明をもらうことになっている。

そういうわけで来賓者用の持ち合い室で案内をしてくださる先生を待っているんだが、30分待っても来ない。

出されたコーヒーも飲んでしまい、はつきり言ってやることがない。

まあ、こういう年度末の時期だから先生たちも仕事で忙しいのだろう。

しかしまあ、まさか出向社員とはいえ先生になるとは思わなかった。

2年生整備科1クラスの副担任という立場になるみたいだから原作グループにあまりかわらないというところはかなり助かった。

授業も基本整備科の実習が主だからこの点でもあまりかわりがなし、進級したとしても原作グループはパイロットのほうから厄介事に巻き込まれる確率はかなり低いだろう。

まあ一部授業は1年生のものをやらないといけないからそこは覚悟しなければならないが。

とはいえ整備の授業だからそこまで問題は起きないだろう。

……そう願いたい。

「すみませ〜ん、お、遅くなりましたあ」

おっ、どうやらやっと来たようだ。

ん？ この下屋 則子ボイスもしかして……

こっちに向かってくる人影に目をやる。

緑髪のショートカットに小柄な体格にメガネをかけた童顔。

「案内を担当させていただきます、山田 真耶です。よろしくお願いします」

言わずもがな原作キャラの一人だ。

「アナハイム社から出向してきました、山田 太郎と申します。本日はよろしくお願いします」

そう言って名刺を渡す。

山田先生もいえいえ、こちらこそと言って名刺を受取る。

まさか山田先生が案内担当だとは思わなかった。

名刺も渡したし、もしかしたらこっちに気付いてくれるかも。

山田先生はこっちを上から下までじーっと見て首をかしげる。

「……どうかしましたか？」

「あつ、えーっと、いえ何でもないです。えっと、それではついてきてくださいね。」

そう言つて山田先生は案内をし始める。

もしかしたらと思つたけどやっぱり覚えてないか。

実のところ俺と山田先生は従姉弟同士である。

初めてあつたのが俺が14歳ころ、父方の曾爺さんが110歳で大往生した葬式の時である。

ウチの実家ではなぜかほとんど親戚付き合いがなく親戚にあつたのがこの時初めてだったため、まったく付き合いのなかった曾爺さんが死んだことよりもそっちのほうに驚いた。

その時はちょうど年が近かつたのが俺と山田先生位だったから結構話した記憶がある。

葬式の後には2回ほど正月などで顔を合わせたがそれきり疎遠になつてしまった。

まあそれほど親しかったわけではないし、覚えてなくて当然だろう。それにしても初めて会った時と容姿がほとんど変わってない。

一部分がさらにご立派になっている位だ。

はつきり言ってまだ高校、いや中学生でも通用するんじゃないかなこの人。

老け顔だった自分にとってはまったくもってうらやましい。

「……あ、あの、どうかしましたか？　もしかして何か付いてます？」

ちよつとじろじろ見すぎたようだ。

何でもありませんよと言って案内を続けてもらった。

「最後にここが職員寮になります。」

と山田先生が言う。

職員室や教室、ISアリーナなどを案内してもらい最後は寮だ。

しかし、IS学園の設備は他の高校なんかと比べ物にならないほど

いいな。

設備はすべて最新のものだし、さすがはIS学園というべきか。

今見ている寮も外見はどこかの高級マンションと見間違えるくらいだ。

「……すげえ」

思わず声が出てしまった。

山田先生もクスクス笑ってるし、かなり恥ずかしい。

その後中へと案内してもらい設備の説明を受け、自分の部屋の前で鍵を渡される。

「これでIS学園の説明は最後となります。お疲れさまでした」

どうやら最後のようだ。

IS学園はかなり広いから結構疲れた。

「もし部屋のことわからないことがあれば寮長さんか私に聞いてくださいね。」

と言って隣の部屋をドアを開ける。

「もしかしてお隣さんですか？」

「はい、そうですよ。よろしくお願いしますね」

山田先生の隣に引っ越してきたみたいだ。

それなら丁度いい。

少し待っててくださいと言って自分の部屋の中に入る。

かなり広くてきれいだがそれは今は置いて、荷物を探る。

……おっ、あったあった。

急いで山田先生のところへ戻る。

「隣に引っ越してきた山田です。よろしくお願いします」

と引っ越しの挨拶の品を渡す。

どうもご丁寧にと山田先生は受け取った。

ちなみに渡したのは洗剤の詰め合わせだ。

「改めてよろしく願いしますね、山田先生」

なんか、先生と呼ばれるとむずかゆい。

恥ずかしかったのでよろしく願いしますと言ってすぐに部屋に入った。

さて荷物の片づけでもしますか。

サクラは今入学式の最中なんだろうなあ。

こんなことを考えながら整備科の教室に向かう。

やべえ、めっちゃくちゃ緊張してきた。

「あらあら、山田先生。そんなに緊張なさらないでくださいな」

そう声をかけてくれたのは整備科担任のソフィア・ロード先生。

結って右肩にたらしたハニーブロンドの髪に深いブルーの瞳、溢れんばかりの母性を持つ美人で、洗練された立ち振る舞いからどうしてもどこかのお嬢様とは思えない。

汗臭いイメージのあるメカニクまったくもって似つかわしくない人だ。

とはいえ緊張するものはどうしようもない。

その上自分以外全員が女子なのだ。

今になって初めて原作主人公の織斑君の辛さがわかった気がする。

「ふふふつ、大丈夫ですよ。いい子ばかりですから」

ちなみにソフィア先生は去年は一年生を担当していたとのこと。

いい子ばかりとはいえそういう問題じゃないんだけどなあ。

……うだうだ考えても仕方ないから覚悟を決めよう。

担当クラスがどんどん近付いてくる。

『2年A組』

IS学園に2年生から一クラスだけ作られるIS開発・研究・整備を専攻にした「整備科」のクラスだ。

「それでは皆様、席についてください。ホームルームホームルームを始めますよ。」

教室に入りながら決して大きな声ではないもののはっきりと通る声でソフィア先生は生徒たちに言う。

そしてそれについて俺も中に入る。

ガタガタとあわただしく生徒全員が席に着いた後、視線が一気に俺

に注がれる。

……これはヤバい。

何というかヤバい。

「今日から皆様の担任になりました、ソフィア・ロードと申します。初めての方ははじめまして、今年も一緒の方はまたよろしくお願ひしますね」

黒板の前にソフィア・ロードとウィンドウが出る。

次は俺の番だ。

覚悟を決める。

「副担任を担当させていただきます、山田 太郎と申します。よろしくお願ひします」

ヤバい、これしか言えなかった。

生徒たちからも微妙な雰囲気が出てるし。

「山田先生はアナハイム社からの出向社員で現役のメカニックの方です。今年から特別講師という形で整備の時間の実技を主に担当されますのでその時はしっかり話を聞きましょうね」

ソフィア先生がフォローしてくれた。

助かった、ありがとうございます、ソフィア先生。

「それでは山田先生への質問………といきたいところですが、その前に学力診断テストを終わらせちゃいましょう。」

ええー！！とかなんとお！！とかオ・ノーレ！！とか生徒たちから声上がる。

俺もいきなり質問とか言われてかなり焦った。

ソフィア先生も悪戯ばい笑顔を浮かべている当たり確信犯だろう。

意外とソフィア先生は茶目っ気があるのかもしれない。

それとIS学園にも学力診断テストってあるんだな、初めて知った。

テスト用紙を生徒たちに配りながら俺はそう思った。

………疲れた。

職員会議も終わり寮へ戻る。

テストが終わった後生徒たちから年齢は？とか彼女いるの？とか好きな食べ物は？とか趣味は？とか俺がガンダムだとか質問攻めにあつた。

はつきり言って女子高生のパワーに圧倒された。

あれは阿修羅すら凌駕する存在でもないと勝てんぞ。

ソフィア先生に助けを求めてみるもあらうふふとか言って傍観してるだけだったし。

まあ、こんな状態になったのは1限だけだったから何とか乗り切れたけど。

ちなみに2限以降は男性初のISパイロットを見に行ってたらしい。

頑張れ織斑君、応援しているぞ。

そんなこんなのこと考えてるうちに寮についた。

即行ベットにダイブする。

もう限界だ、飯とか食べてないけどめんどくさいし、風呂は朝でいいか。

ふとサクラがどのクラスになったか気になったけど俺はさっさと寝ることにした。

—— クラスを聞かなかったことを次の日に後悔することになるとも知らずに。

8話 Side 太郎（後書き）

次回はサクラサイドの話となります。

8話 Side サクラ（前書き）

投稿しようとする ↓ 熱暴走でパソコンが落ちる ↓ 千文字ほど消える
↓ 書き直す ↓ 今度はパソコンがフリーズする ↓ 再起動させる ↓ ウィ
ンドウズ自体が立ち上がらなくなる ↓ 2時間経過 ↓ やっと立ち上が
る ↓ 書き直す ↓ 投稿 ↑ 今ここ。
疲れた……。

8話 Side サクラ

兄さんと別れてから学生寮へ向かう。

寮のエントランスで集合した後、説明会を受け入寮となるようだ。

……めんどくさいわね。

説明の冊子でも渡してそれで終わりでいいと思うのだけど。

そう思っているうちに寮のエントランスに到着する

かなり早めに着いたが、もう相当数の生徒が集まっていた。

とはいえ説明会開始まではまだ30分以上ある。

暇つぶしにIS量産化計画（仮称）でも進めておこうかしら。

そう思いパソコンを起動させた。

……まあ、こんなものかしらね。

キーボードを打っていた手を休める。

G-01で問題だった整備性の悪さについては兄さんの言っていた意見などを踏まえて再設計したことでかなり改善することができた。

今のところ性能はパーツの質などを加味するとラファール・リヴァイヴと同等、整備性で上回るところか。

軽く手を加えただけなので改良の余地はまだあるが、そろそろ説明会が始まる時間だ。

最後にIS量産化計画（仮称）の名前でも考えて終わりにしよう。

G-01を基にした量産化計画だから……、G-01 Mass product（量産型G-01）プロジェクト、略してGMプロジェクトとでもして置おこうか。

IS量産化計画（仮称）をGMプロジェクトと書き換えパソコンを終了させる。

それとほぼ同時に説明担当の先生らしき人が入ってきた。

これから長つたらしい話が始まるのだろう。

そう考えると気分が憂鬱になった。

長々とした説明が終わり部屋割が言い渡される。

私の部屋は1024号室だ。

部屋は2人一組で使われるため例外を除いて必ず同居人がいる。

私の部屋にはもう同居人がいるようだ。

部屋の前まで向かい、ドアをノックする。

はぁーいと間の抜けた声とともにドアが開いた。

……ネコミミ？ いえキツネミミ？

それが彼女と出会った最初の印象だった。

部屋に入ってからさっそく持ってきた荷物を片付ける。

すぐそばのベッドの上お菓子を食べながら何か電話帳みたいな本を
読んでいる、きぐるみのようなパジャマを着た彼女は布仏のほとけほんね 本音。

あいさつ程度しかまだ話してないが、なんというか名前の通りのほ
ほんとした感じの人だ。

そのせいか話のペースがつかめないというか、何となく毒気を抜か
れてしまう。

知り合いがそう多いわけでもないが初めて会ったタイプの人だ。

まあ、悪い人にはどう見ても見えないのでその点は安心できそうだ。

そんなことを考えているうちに片付けが終わる。

……GMプロジェクトの続きでもやるとしましょう。

特に何か特別やることが思いつかなかったので仕事を再開する。

隣の彼女と同じようにベットに寝っ転がりパソコンを起動させる。

なかなかいいベットだ。

自分のラボにあるものとは比べ物にならないがかなりいいものを使っているようだ。

これ位の物ならよく眠れそうである。

とベットの評価はそこそこに仕事を始めることにした。

「ねーねー、なにやってるの〜？」

……っ?!

いきなり話しかけられかなり驚いた。

集中していて彼女が接近してきたことに気付けなかったようだ。

「……何かようかしら？」

少し不機嫌な言い方になってしまったのは仕方のないことだろう。

「うーんとねえ、なにやってるか聞きたかったただだよー、さくらん」

「!？ さ、さくらん？」

さくらんって何？

私のことかしら？

「うん、そーだよ。サクラだからさくらんだよー。」

よ、よくわからないけど、あだ名をつけられたってことでいいのよね？

「あー、もしかしてあだ名嫌だった？」

「そ、そういうわけではないわ、すこし驚いただけ」

そ、そう、なんということはないわ、ただあだ名をつけられただけ、落ち着きなさい私。

「……それで聞きたいことは私が何をやっているかでよかったかしら？」

冷静さを取り戻してから言う。

彼女と話すと本当に調子が狂うわね。

「うん。そーだよ」

何かやられっぱなしでは癪にさわる。

少しからかってみようかしら。

「そうね、今私が書いているのは墮天使の詩。墮天使ルシフェルの使徒たるこの私しか謳うことのできない美しくも悲しい死の調。ただの人間であるあなたが読むとすぐに死んでしまうわ」

これでどうかしら？

「わー、さくらんってすごいんだね」

ほにゃっとした笑顔でそう言われた。

……普通は引いたりするもんじゃないかしら？

「……冗談よ。ただの企画書。」

どうにも勝てそうにない。

私は負けを認めることにした。

「布仏さん、でよかったかしら？ あなたはさっきまで何をしてい

たの？ 何か本を読んでいたようだけど…」

やっぱりちよつと癪に障るので今度は私が質問する。

「本音でいいよ。えーつとね、勉強していたんだよ。入学前には覚えておかなきゃいけないんだつてー」

そう言つて本音はこれだよーと言いながら本を見せる。

あの電話帳みたいな本は参考書のようなのだ。

「さくらは勉強しなくていいの？ たくさん覚えるものがあるよー」

私もやらなくてはいけないものらしい。

そんな本あつたかしら？

……そういえばあつたような気がするわね。

確か…、そう、一通り流して読んでみたけれど、大した内容ではなかったからラボに置いてきてしまったのだわ。

荷物にしてもかさばるのよ、厚いし、大きいから。

「必要ないわね。全部知つてることだったわ。」

あの本に書いてあるのはISの基礎の基礎の用語などだ。

今更改めて学ぶ必要はない。

「へー、さくらんって頭すっこくいいんだ。ねーねー、じゃーさくらん、勉強おしえてよー。こっちで一緒にお菓子を食べながら」
そう言って本音は眼を輝かせながら言う。

GMプロジェクトも急ぐ必要はないし、お菓子も魅力的だったので私は手伝うことにした。

「みなさん入学おめでとう。私は副担任の山田 やまだまや 真耶です」

入学式を終え、クラスに移動した後、副担任の教師が自己紹介をする。

しかし誰も聞いていない。

それもそのはずだ。

IS学園1年1組の生徒の視線はすべて一人の生徒に向かっている。

そう、世界で唯一ISを動かせる男性へである。

当の彼はかなり居心地が悪そうだが仕方のないことだろう。

私も観察しているがごく普通の男性だ。

容姿は整っているが、ISを動かせるような要素は見ただけではわからなかった。

「今日から皆さんはこのIS学園の生徒です。この学園は全寮制、学校でも放課後も一緒です。仲良く助け合って楽しい3年間にしましょうね」

副担任の山田先生が困りながら言っているがやはり誰も聞いていない。

それにしても緑髪に山田という苗字は兄さんを連想するがいとこか何かだろうか？

……それはないだろう。

兄さんの容姿からだと言え美人過ぎて血のつながりは感じられない。

「……っ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で……」

ふと話題の彼が一人の生徒のほうを見る。

……彼女の名前は確か篠ノ之^{のり} 篁^{はな}だったかしら。

篠ノ之と聞くと天才篠ノ之しののたばね 束と同じだが血縁者なのだろうか？

……あり得ない話ではない。

篠ノ之 束は世界各国の国や企業から追われていると聞く。

そうなると篠ノ之 篤も血縁者なら狙われる可能性はかなり高い。

彼女自身IS適性はあるのだろうが、IS学園に入れば国家や企業からの干渉はほぼ受けないから彼女を保護するという目的もあるという可能性は高い。

もちろん彼女が血縁者ならという話だが。

「織斑おりむらくん、織斑おりむら一夏いちかくん！！」

「……っ、は、はい」

山田先生が何やら言っているがどうやら彼の順番のようだ。

「えーっ」

そういつて立ちあがる。

「えっと、織斑 一夏です。よろしくお願いします。」

周りの視線が彼、織斑 一夏に集まる。

彼は大きく深呼吸をして…

「以上です!!」

皆がずっこけた。

当の彼は黒髪でスーツを着た女性に殴られていた。

その女性は多分篠ノ之 束と並ぶ世界一有名な女性だろう。

モンド・グロツン
第1回IIS世界大会総合優勝および格闘部門優勝者であり世界最強の称号「ブリュンヒルデ」を持つ女性。

「諸君、私が担任の織斑おじむいちはる 千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ」

そう多くの女性のがこれの的、そして目標である本物の織斑 千冬だ。

ドッと教室がわく。

はっきりに言ってるさい。

しかし織斑 一夏が彼女のことを千冬姉と呼んでいたことから姉弟なのだろう。

彼女の弟であることが彼がISに乗ることができる理由なのだろうか？

……あり得ないわね。

自らの考えを否定する。

それなら姉がISに乗ることができれば弟も乗ることができるという公式が成り立つはずだ。

それができない姉弟なんて世界中に腐るほどいる。

ISに男が乗れない謎はそんなに簡単なものではない。

……考えるのはそのくらいにしておこう。

今は目下の危機を乗り切ることだ。

そう、自己紹介である。

私が考えていた自己紹介は織斑　一夏と同じ名前のみであったがだめらしい。

皆の自己紹介では名前の後に出身校や趣味なんかを言っていた。

出身校はMITで博士号取得でいいわね。

趣味は料理だから楽勝だわ。

……うん完璧ね、なにも問題ないわ。

「次、サクラ・アナハイム」

織斑先生が私を指名する。

「サクラ・アナハイムよ。出身校は…、MITで博士号を取っているわ。趣味は料理ね。……以後よろしく」

完璧ね。

そう思いながら席に着く。

その瞬間ドツと笑いが起こった。

……一体何が悪かったのだろうか？

「お前たち、一度黙れ」

突然、織斑先生が言う。

一気に教室が鎮まった。

「アナハイムが言っていることは事実だ。MITで博士号を複数取得している」

そついうとまた教室がざわめき始める。

織斑先生が続ける。

「このクラスには本当にバカ者しかいないようだな。ニユースを見ていれば一度は名前を聞いたことがあるだろうに。ISの世界的な権威だぞ」

嘘ー！！と今度は驚愕の声で教室が沸く。

織斑先生には助けられたようだ。

その後は自己紹介はつつがなく終わり、授業に入る。

授業自体は基本的なものであり、特に学ぶべきものはなかった。

ただし授業中に別のことをやることだけはやめようと思った。

織斑先生に見つかってファイルを頭に食らったが、あの威力は何度も食らうと死ぬと思う、脳細胞が。

放課にはイギリス代表候補生がエリートとか何とかと織斑 一夏に突っかかっていたが私には関係ないことだった。

こっちはこっちでクラスメイトから質問攻めにあっていたのでそっちを意識する余裕がなかったただけだが。

寮に戻ってからは、隣の1025号室がやけにうるさいと思ったらどうやら織斑 一夏の部屋でまた何かやかしたらしい。

次の日の朝に1025号室の前を通ったら、ドアにいくつか穴が開いていた。

猛獣とでも戦ったのだろうかと思ったがあまり興味のないことだったのでさっさと朝食を食べに行くことにした。

……朝食は本音たちと一緒に織斑 一夏とすることになったが、篠ノ之 箒と幼馴染ということがわかっただけで特に話したわけではないので割愛する。

寮長の織斑先生が遅刻したらグラウンド10周させると言っていたので遅刻だけはしないようにしよう。

1周5キロ近くあるのだ。

遅刻したらフルマラソンは嫌過ぎる。

「これより再来週行われるクラス対向戦に出る代表者を決める」

退屈な授業が終わり、織斑先生が言う。

……クラス対向戦に出られるのはG・01の戦闘データを集めるのには魅力的だけどクラス長の役割は少し動きづらいわね。

そうとはいえ生徒会とのつながりが持てると考えると魅力的かしら……

そんなことを考えているうちに織斑　一夏が推薦された。

当の本人はものすごく戸惑っているが。

ハイ！、とさらに生徒から手が挙がる。

「アナハイムさんがいいと思います」

……………私！？

さすがに推薦されるとは思わず驚いたがいい機会だ。

特に断る理由もない。

「他にはいないのか？　いないなら織斑とアナハイムの2人で決めてもらうことになるが……………」

と織斑先生が言う。

その瞬間バン！！　と机を叩いた音が響く。

「納得がいきませんわー！！」

一気に視線が机を叩いた彼女、イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットに向かう。

「そのような選出は認められません！！ 代表候補生でないものや、まして男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか！！」

どうやら代表候補生である自分が推薦されなかったことに納得がいてないらしい。

……少し自意識過剰が過ぎるのではないかしら。

「大体！！ 文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で……」

……。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

……見苦しいわね。

「おいしい料理だってたくさんありますわ！！ あなた、私の祖国を侮辱しますの！！」

「見苦しいわね。一回黙ったらどうかしら？」

「「なっ！！」」

二人がこつちを見る。

…… 本当に見苦しい。

まず織斑　一夏に語りかける。

「相手の祖国を辱めてはだめよ。それではそこにいるエリート気取りの下種と同じになってしまうわ」

「下種！？　あなたこのわたくしを下種と言いましたか！！」

セシリア・オルコットが顔を真っ赤にしながら噛み付いてくる。

滑稽ね。

「…… 違ったかしら？」

「当たり前ですわ！！　即刻訂正なさい！！」

「お断りするわ。どうやらあなたと私ではエリートの認識が異なるようね。代表候補生だからといって他人を見下し、男だからといって差別し、他人の国の文化を侮辱する。これがあなたのいうエリートのようにけど、この国ではそれを下種というのよ」

「……っ！！　決闘ですわ！！」

「四の五の言うよりよっぽど分かりやすいわね。あなたもそれでいいかしら、織斑　一夏？」

そう言つて彼に振る。

えっ、ああ、うんってあなたも当事者なのよ。

「ああ、でもわたくしは代表候補生で専用機持ち、あなたたちは素人同然で専用機すら持つていない。この差は歴然、2対1位のハンデはつけて差し上げてもよろしくてよ」

まだ頭に血が上っているのか挑発してくる。

「いいわね、それ。時間を掛けずにあなたを再起不能にできそうだね。どうかしら、織斑 一夏？ イギリスの代表候補生様はハンデをつけてくださるそうよ？」

もちろんそんなものはこちらからお断りだが。

「そんなものはいらない。ハンデなんてつけたら男が廃る」

あら、意外に言つじやない。

「同感ね。むしろ、油断していると手も足も出ず負けるわよ」

嘲笑を浮かべ言つてやる。

「馬鹿にしてえ！！ 馬鹿にしてえ！！ 馬鹿にしてえ！！」

効果は抜群のようだ。

「話はまとまったな。それでは勝負は次の月曜、第三アリーナで織斑、オルコット、アナハイムの総当たり方式で行う。3人はそれぞれ準備をしておくように。……それとオルコット。言っておくがアナハイムは専用機持ちだ。そして織斑にも学園から専用機が用意されることになっている」

と織斑先生は言う。

一気に教室がざわめいた。

セシリア・オルコットも驚いているようだ。

「ま、まあそれを聞いて安心しましたわ。わたくしとあなたたちでは勝負は見えていますけど、さすがにわたくしが専用機、あなたたちが訓練機ではフェアではありませんものね」

「……さっきまで2対1のハンデをくれるとか言っていたのはどの誰だったかしら？」

しっかり墓穴を掘っているわよ、その発言。

「それはあなたたちが専用機を持っていないと思っていたからですわ！！」

「オルコットもアナハイムも一度黙れ。……織斑、お前の専用機だ が用意されるまで時間がかかる。本来は学園にある予備機を使わせる予定だったが、あいにく空気がなくてな。専用機は本来、オルコットのように国家に所属している者やアナハイムのように企業に所属している者にしか与えられない。……が織斑の場合状況が状況だ。データ収集のために特別に専用機が急遽用意されることになった。」

しかしこれも例外中の例外だ。だから準備に時間が掛かる。それだけは覚えておけ」

と織斑先生は言った。

さて、大口をたたいたが相手は代表候補生だ。

専用機ブルー・ティアーズよりもG-01のほうが性能が高いが、操縦時間に差がありすぎる。

相手は少なく見積もっても300時間以上は確実に操縦しているだろう。

機体の性能差を加味すると五分というところか。

……練習が必要ね。

勝つにはとにかくその差を埋める必要がある。

相手は織斑　一夏にでも手伝ってもらうことにしよう。

どちらも練習できて、こっちはデータも取れるから一石二鳥だ。

兄さんには早速、専属メカニックとして働いてもらうことにしよう。

そう思い兄さんに電話をかけようと携帯電話に手を伸ばした。

9話 Side サクラ（前書き）

本当は太郎Sideを書くつもりでしたがこっちが先に書いてしまいました。

9話 Side サクラ

兄さんに連絡を取り放課後の練習に付き合うことを約束させる。

というよりこちらが本来の仕事だ。

まったく兄さんは先生にでもなるつもりなのかしら。

本来の仕事を忘れるなんてこれだからただ人間は困るわね。

だから、罰として休日買い物に付き合うように魔の契約を結ばせておいたわ。

もし忘れようものなら堕天使ルシフェルの名において一天罰（減給）が下ることでしょう。

ゆめゆめ忘れようにしなさい、兄さん。

さて、今探しているのは織斑 一夏だ。

教室をぱつと見渡してみるが見つからない。

少し席をはずしている間にどこかに行ってしまったようだ。

「さくらんー、一緒にゴハン食べよ」

本音が声をかけてきた。

「ごめんなさいね、今人を探しているのよ」

と私は本音の申し出を断る。

昼食時だから教室にいないとなると食堂かしら？

「あー、さくらん、おりむー探してるんでしょ？」

「……よくわかったわね。」

少し驚きなが言う。

……意外と鋭いのね、彼女。

「もしかして私の魔力の影響であなたも魔眼に目覚めたのではないかしら？」

「わーい、私まがんに目覚めちゃった」

「いや、ないから」

こう言っているのは本音の友人の谷本 癒子と夜竹 さゆかだ。

「あら、癒子にさゆか。堕天使ルシフェルの使徒であるこの私の魔力を浴びているのだからあり得ないことではないわよ」

「はいはい、厨二病厨二病。織斑君なら篠ノ之さんと一緒に食堂に行ったよ」

癒子がそう言う。

やっぱり食堂みたいね。

「でも、篠ノ之さん、すつごく機嫌が悪そうだったよ。織斑君を突き飛ばしてたし」

さゆかがそう続ける。

「そう、ありがとう。でも大丈夫よ。たかが人間にやられはしないわ」

「いや、ホントにやめといたほうがいいよ!!　すごく怖かったし」

癒子がそう言う。

さゆかもうんうん頷いている当たり、相当機嫌が悪いようね。

「大丈夫よ、少し話してくるだけだから」

「……それならいいけど。気をつけてね」

さゆかにありがとうと言ってわたしは食堂に向かうことにした。

「相席よろしくて？」

織斑　一夏と篠ノ之　箒の座っているテーブルを見つけそう言う。

織斑　一夏はああ、いいぜと快く了解してくれたが、篠ノ乃　箒はものすごい顔で睨んできた。

「……敵のあなたが私たちに何か用でしょうか？」

篠ノ之　箒が敵意をあらわにしながら聞いてくる。

敵って、おい箒…と織斑　一夏がなだめていたが効果はあまりないようだ。

「あら、私は席が開いていなかったからクラスメイトがいる席にお邪魔させてもらっただけよ」

「しらばつくれるな！！　何が目的だ！！」

織斑　一夏が必死になだめようとしているが、篠ノ之　箒は噛み付かんばかりに威嚇してくる。

「そんなに警戒しなくてもいいわ、織斑　一夏に少し用があるだけ」
そう言って織斑　一夏のほうを向く。

「単刀直入に言うわ。織斑　一夏、私と一緒にISの訓練をしない？」

「結構です。私と訓練することになっていきますので」

またかと言いながら篠ノ之 箒が即座に口をはさんでくる。

どうやら私が来る前に似たようなことを誘われたようね。

「あなたには聞いてないわ。それにあなたの言っている訓練はISについての知識を教えることかしら？ それなら勝手にしてもらって構わないわ。私が言っているのはISの実機を使った訓練のことよ。」

「違います。一夏の訓練については私がすべて担当することになっていますので」

「あら？ 予備機がなくてISが借りられない状態でどうやって訓練をするつもりかしら？」

「……っ！？ それはあなただって同じでしょう！！ 一夏の専用機はまだ届いていない！！」

「そうね。確かに専用機は届いていない。でもISさえあれば一応簡単な練習はできる。そうでしょう？ つまり、こちらには織斑一夏に決闘当日までの期間ISを貸し出す用意がある、そういうことよ。」

「「…っ！！」「」

2人とも驚いているようだ。

そう、こちらにはISを貸し出す用意がある。

お父様から了解ももらっているし、彼のデータが取れるならこのくらい安いものだわ。

「アナハイム社所有のISだから諸費用はすべてこちら持ち。対価は練習に私も参加させること。どう？ 織斑 一夏。あなたISの操縦経験、ほとんどのないでしょ。ISに乗れるのだから悪い話ではないと思うのだけど？」

むしろ彼にはメリットしかないはずだけど。

「うん。考えてみれば、すっげえ魅力的だ」

そう織斑 一夏は言う。

「一夏！？ 駄目だ！！ おまえはこいつと戦うのだぞ！！」

「ち、ちよつと待て、落ち着けて、箒」

織斑 一夏がなだめようとしているが止まりそうもない。

なぜ、篠ノ之 箒はここまで彼に固執しているのかしら。

もちろん私が彼とは敵対する関係にあることはわかるけれど……

彼は篠ノ之 箒とは幼馴染だ、と少し前の朝食の時に言っていたけれども、教室での関係をみる限りそこまで親しいとは思えないわね。

まさか、私に彼との時間を盗られることが嫌だとか？

つまり、教室で彼に厳しく当たっているのはただ照れ隠しだったか
もしれないと……

「……はあ、サクラ・アナハイムさん、であってるかな？」

織斑　一夏が少し疲れた表情で言う。

どうやらなだめられたらしい。

「サクラで構わないわ」

「じゃあサクラ。この話すっげえ魅力的だけど、箒が手伝ってくれ
るから…、その…、ごめんな」

彼はそう言う。

どうやら振られたみたいね。

「そう、それならいいわ」

二人とも意外そうな顔をしている。

「……そんなに意外だったかしら？」

「いや、もう少しぐらい粘るかなあと思ったんだけど…」

そう彼は言う。

「私だって引き際ぐらい弁えているわ。悪かったわね、時間を取ら

せてしまつて。後は二人で頑張りなさいな。健闘を祈っているわ」

「ああ、そつちこそな」

そう言つて私は食堂を後にした。

「じゃあ、ターゲット出すぞ」

兄さんのアナウンスとともにアリーナ内にターゲットが配置される。

バスターライフルを低出力にし、テンポよく撃っていく。

48ポイント。

まあ、こんなものかしら。

「ターゲットはもういいわ、兄さん」

兄さんに通信を入れ、機動訓練に移る。

急加速、急停止、急旋回と変形などを駆使してアリーナ内を縦横無尽に飛び回る。

今、力を入れて練習しているのはイグニッション・ブースト瞬時加速だ。

これを上手く使いこなせば奇襲や高機動戦闘にも幅が出てくる。

特にブルー・ティアーズは公表スペックをみると明らかな射撃重視の機体だ。

多分懷に入れば相手は有効なダメージを与えられない。

成功率は6割程度とまだ低めだが、本番までにはなんとしてもモノにしなければならない。

私は黙々と反復練習を続けた。

――「サクラ、時間だ。撤収するぞ」

兄さんから通信が入る。

もうそんな時間なんて、集中すると早いわね。

今日の成功率は大体7割程度、大分モノにできてきたようだ。

私は了解と一言だけ言い格納庫へと向かった。

格納庫内では兄さんがもう整備の準備をしていた。

「お疲れ」

所定の着陸させるとすぐに兄さんがドリンクとタオルを手渡してく

れる。

ドリンクを飲みつつ整備が終わるのを待つ。

「どうだ、調子のほうは？」

兄さんがG・01をチェックしながら聞いてくる。

「機体のほうは上々よ、後はセシリア・オルコットとどれだけ差を詰められるかってとこね」

「そうか、でも数日前よりは上手くなってると思うぞ」

よし、チェック終わりと言いながら兄さんは言った。

「焼け石に水程度よ。代表候補生との経験の差はそれだけ大きいわ」

私はISを待機状態にしながら言う。

「焼け石に水でも、その焼け石の温度は少しは下がったんだろう？
勝率は上がってるさ。それに負けてやる気はさらさらないんだろ
う？」

兄さんは笑いながら言う。

「当たり前よ。ルシフェルの使徒たるこの私がただの人間程度にそう
そう遅れはとらないわ」

そう私は言った。

それにこれはG・01のデビュー戦でもあるのだ。

絶対に負けさせはしないわ。

「そう言えばもう一人の相手、織斑　一夏君には勝てそうなのか？」

兄さんはそう聞いてくる。

「専用機がどんなもので変わってくると思っけれど、今のところよほど相性が悪くない限り負けはしないと思うわ」

と私は言った。

何か剣道の練習をしていると聞いたけどISの練習はどうするつもりなのかしら？

彼自体ISについてまだ分かっていないことも多いと聞いているし、しっかりと教えているのかしら、篠ノ之　箒は？

まあ彼女はあの篠ノ之　束の妹であると聞いているから、教えてはいるのでしょうか。

「……まあ、それならいいんだが」

兄さんはちよつと考えた様子で言う。

「あら、私が負けるとでも言うのかしら。兄さんは？」

もし負けると思っているのならむかつくわね。

「いや、そういつわけじゃ……。同じ男としては頑張っただけだぞ」

まあ、それなら気持ちは分からなくてもない。

「一応、油断だけはするなよ。勝負なんてどんなことが起こるか分からないからな」

「分かってるわ。そろそろ行きましょう。早く着替えたいわ」

織斑 一夏について兄さんの様子にちょっと引っかけたけれど、後は私のできることをするだけだわ。

そう思いながら更衣室へと向かった。

9話 Side サクラ（後書き）

×篠ノ乃 篠ノ之でした。
訂正してお詫びします。

9話 Side 太郎（前書き）

リアルが忙しく更新が遅れてしまいすみません。
今回も遅れた割にかなり短めです。

9話 Side 太郎

今日の授業も終わり、帰宅の途に就く。

最初は学校の先生なんてできるのかと思ったけど、やってみると結構なれてくるものだ。

といってもまだ実技の授業があるわけでもないため大した仕事はしてないが。

やったことと言えば3年生整備科と一緒に練習で使用了訓練用ISの整備位である。

さすがIS学園というべきか、3年生にもなるとほぼ一流と言えるような腕を身につけている生徒もいる。

こっちが指示しなくてもほとんど見ているだけでも大丈夫だった。

まあ、せっかく他社のISにさわれるのだから1つは自分が整備しただけ。

それだけの腕を持っていれば企業に政府にと引っ張りだこだろう。

なんともうらやましい限りだ。

そんなこんなのことを考えているうちに寮についたので鍵をあけることにする。

部屋に入ってベットにドライブするとポケットが震えていることに気付いた。

……ん？ 携帯が鳴ってるみたいだな。

出るの面倒くせえ。

携帯をみるとサクラ・アナハイムの文字が出ていた。

「出るのが遅いわ。ルシフェルの使徒たるこの私が掛けているのだから3コール以内に出なさい」

出れるか、無茶を言うんじゃないかねえ。

「……でなんだよ、用件は？」

「仕事よ」

「仕事ならもう終わった、今日はもう閉店だ」

ハア、とあきれたようにサクラはため息をつく。

「兄さんは教師になるためにここに来たのかしら？」

「違うが……、一年じゃあISを使う授業はまだのはずだろ？」

定期メンテナンスは一週間に一度だからまだのはずだし、皆目見当

がつかん。

「クラス代表を決めるのに試合をするのよ。そのための練習をするからメンテナンスを頼みたいのよ」

「へー、クラス代表ねえ……、ん？」

クラス代表？

ちょっと待て。

あれか？

クラス代表をかけて戦うのってあれか？

原作のせっしーとおりむーがバトるあれか？

いやまだだ、まだ、あわてるような時間じゃない。

サクラが1年1組じゃない可能性だってあるんだ。

そうだよな、別のクラスでも同じことやってるよな？ な？

そうだKoolになれ、Koolにだ。

「なあ、サクラ。お前1年何組だ？」

うん違うぞー、サクラは違うクラスだぞー

「1組よ。それが何？」

＼（＾０＾）／オワタ

「どうかしたの？ いきなり黙ってしまって」

「……ちよつと人生の不条理さを打ちのめされてるだけだ」

なんでよりによって1組でせしーとおりむーのバトルに巻き込まれてんだよお！！

これじゃあ、間違いなく原作に巻き込まれるじゃねえか！！

この世界に神はいない。

「……よくわからないけど、まあいいわ。明日から早速練習するから放課後アリーナ前にきて頂戴」

「りょーかい……、はあ……クラス委員なんて厄介事をしようだなんてお前らしくもない」

頼むから首を突っ込んでほしくなかった。

「推薦されたのよ。私の意思じゃないわ」

そういや、原作で織斑君も推薦で選ばれたんだっけ？

よくよく考えてみればサクラも一応有名人だし、推薦されてもおかしくはないか。

「それに、気に食わなかったのよ、イギリスの代表候補生のことが男を見下すのはまだいいわ、私には関係ないことだし。ただ、この国を辱めたことが気に食わないのよ」

「……小母さんのことが」

小母さん、サクラのお母さんは日本人でとても優しい人だったが体が弱く、数年前に亡くなっている。

だから、母親の生まれ故郷だった日本を辱められたことが気に食わ

なかったのだろう。

「それもあるわ」

もってなんだよ、もって？

「この国には誇るべきオタク文化堕天使の文化があるわ。そしてそれは私の心よ、魔力の根源だわ！！それを辱めるなんてよっぽど呪われないよね。……フフフ、いい度胸だわ。もし勝ったら私秘蔵の薄い本聖典やアツ……な本聖書で一人前の使徒として転生させてあげるわ！！」

おいバカやめろ

やめろ

そんなセシリア・オルコット見たくねえよ！！

誰得だ！！

というか怒るところそこかよ！！

シリアスになりかけの空気返せ。

「そうよ、そう。足りないのよ。私の魔力が……。だから、補充

しないよね、フッフ……」

「あーこれからようじがあっただんだからでんわきるぞー（棒）」

やっべえ！！

なんか、すんげえ悪い予感がする……！！

「あら、兄さん、なに勝手に電話を切ろうとしているのかしら？
まだ話はオワツテナイワヨ……」

／（＾○＾）＼ナンテコッタイ

その後俺は給料を盾にされ、サクラの聖地巡礼に荷物持ちとして引きずり廻されることとなったのだ……。

薄い本のところならまだしもアツーなところを引きずり廻すのはやめろやめてやめてください、感想とか聞かれても分からないからカップリングとかも分からないから周りの視線が刺さってイタいいたい痛い！！

……大きな星がついたり消えたりしている。

大きい……！！

彗星かな？

違うな、彗星はもっとパァーッと動くもんな……。

聖地巡礼に引きずり廻されると常人には辛いことになると思い知らされることとなった日だった。

9話 Side 太郎（後書き）

次回はセシリア、織斑との決闘です。
戦闘シーンは初めてなので上手く書けないかもしれませんが頑張ります。

10話（前書き）

セシリアとサクラの試合です。

10話

「まずはオルコット、アナハイム、お前たちからだ。準備しろ。」

黒いスーツを着た女性、織斑 千冬が言う。

一瞬の光とともに薄暗い格納庫の中に二機のISが姿を現す。

起動したハイパーセンサーに情報が次々と映し出される中、サクラ・アナハイムは今まで感じたことがない異様な感覚に襲われていた。

それは緊張感と高揚感が入り混じったような感覚。

サクラはどうにも気分が落ち着かなかった。

そう言うなれば、自分の感覚ではないような、どこから流れ込んでくるような感覚。

ISには独自の意識があるといわれているが、もしかしたらこれが彼女の意識なのかもしれない。

そう考えると自然と納得することができた。

（そう、これは私にとっても彼女にとっても初陣。だから……）

—— 負けたくない。

そう考えると、ISが力強く反応したようにサクラは思えた。

「それではオルコットさん、アナハイムさん、カタパルトの方へ移動してください」

山田真耶からの通信が入る。

「お先に失礼しますわ」

もう一機のIS、セシリア・オルコットから通信が入る。

カタパルトに移動し、重厚な音とともに脚部が接続される。

「カタパルト接続完了、進路クリア、発進タイミングをセシリア・オルコットに譲渡します」

「I have control・セシリア・オルコット、ブルー・ティアーズ行きますわ!!」

弾丸のようなスピードに加速され青いISは飛び出して行く。

それに続いてサクラはカタパルトに移動する。

「続いて発進タイミングをサクラ・アナハイムに譲渡します、頑張ってくださいね」

「了解、G・01行きます!!」

——急加速。

一对の羽を広げG・01は大空へと飛翔した。

「最後のチャンスきゃあ!？」

通信を入れてきたセシリアに向けて、サクラはマシンキャノンを放つ。

「いきなり何をするんですの!？」

咄嗟に緊急回避をしセシリアは怒ったように言う。

「もう始まっているのではなくて？　なら別に撃っても構わないでしょう?」

バスターライフルを呼び出し、突きつけながらサクラは言う。

「このわたくしが、このわたくしが折角チャンスを差し上げようと思いましたが……」——もう許しませんわ!!——

警告音が鳴り響く。

その瞬間ブルー・ティアーズに装備されている巨大なライフル『スターライトmk?』が火を噴いた。

銃口から放たれた一条の光の弾丸がサクラを撃ちぬかと突き進む。

狙い、弾道、すべてがイメージ通りの一撃。

（当たる!!）

そうセシリアは確信する、大した経験のないサクラでは絶対に避けられないと。

——だがその射撃は空を切った。

（外しましたの!?!）

命中を確信して放った会心の一撃。

しかしそれが当たる瞬間、——相手が消えた。

（消えた!?! いえ、おそらくは瞬時加速!!）

すぐさまその考えを否定し、ハイパーセンサーを駆使して周囲を索敵しようとする。

——警告音。

考えるよりも早くセシリアの体が動いた。

——斬。

後方からビームサーベルによる斬撃。

間一髪、かろうじてセシリアは回避に成功する。

（避けられた！？）

相手の意表を突き行った奇襲。

それを回避されサクラにかすかに動揺が走る。

しかし、咄嗟の回避だったためかセシリアの体勢が崩れた。

サクラはそれを見逃さない。

「逃がさない！！」

体勢を崩しながらも離脱して間合いを取ろうとするセシリアにサクラは瞬時加速を駆使し、その爆発的加速を込めたシールドを叩きこむ。

手に重く突き刺さった感覚。

そのままスラスターを噴射させ、一気に地面へと叩きつける。

——轟音。

地面に着弾と同時に膨大な土煙が高々とあがる。

（好機！！）

バスターライフルに瞬時に持ち替え、ハイパーセンサーを駆使し土煙の中心にいるブルー・ティアーズに狙いをつける。

——最大出力、ターゲット確認。

「落ちなさい!!」

トリガーを引く。

銃口から飛び出した巨大な光の柱がセシリアのいる地面へと突き刺さった。

「きゃああああ!!」

バスターライフルの閃光とすさまじい爆発に、モニター越しに見ていた山田 真耶はたまらず声をあげた。

そのあまりの威力故かモニターが不調になり上手く映らなくなる。

「山田君、状況報告!!」

織斑 千冬が即座に指示を出す。

「は、はい、——ブルー・ティアーズ……健在！！ 実体ダメージ微少、シールドエネルギー……4割減！！ な、なんて威力ですか！！」

即座に気を取り直し、計器を確認した真耶が驚愕の声をあげる。

「……まさかな、掠っただけでこれほどの威力とは」

「掠っただけって……、このダメージですよ！！」

軽く目を見開いて驚いていた千冬の言葉に真耶は信じられないように言う。

「発射の瞬間、一瞬タメが出来ていた。その瞬間にかるうじて掠る程度で避けていたのを確認できた。それにあれだけの威力の攻撃だ。いくらシールドバリアがあったからと言って実体ダメージが微少というのはさすがにおかしい。そうだろう、山田 太郎技師？」

千冬は近くにいる一人の男性、山田 太郎に声をかける。

「大体織斑先生の言うとおりです。先ほどの攻撃、直撃を受けたらまず大破レベルの実体ダメージは受けます。それに、エネルギーダメージも防御重視のISで8割近くのダメージは叩き出せますよ。ブルー・ティアーズは第三世代機ですけど機体性能は軍用第二世代機程度、それに特に防御重視ってわけでもないから直撃していたらさっきの一撃で終わってたかもしれませんね」

そう太郎は返答した。

「……そんな」

真耶はそのあまりの威力に絶句する。

「まあ、織斑先生の言う通りフルパワーで撃つ時は一瞬タメが入りますし、移動しながらは撃てませんし、何より3発で弾切れ。フルパワー以外ならまだしもそんなに使い勝手がいいものじゃありませんよ」

「十分反則です！！ それにまだ2発も撃てるんですか！！」

零落白夜と比べれば甘い甘いという太郎に対し真耶が反論する。

それを見て千冬は二人の頭に拳を振り落とした。

「もうオルコットが動いている、黙って見ろ」

どうやら2人がぎゃーぎゃー言い合っているうちに動きがあったらしい。

3人はいつの間にか正常になっていたモニターに目を移した。

（なんですの今の攻撃は！？）

セシリア・オルコットは驚愕していた。

自分に向かってきた巨大な光の柱を、地面に叩きつけられて上手く動かない体を咄嗟に動かし、回避した。

否、かろうじて回避できなかった。

それでもわずかに掠った程度、大したダメージにもならない、そのはずだった。

（掠っただけでシールドエネルギーの4割も持っていられるなんて、いったいどんな攻撃力なんですよ！！）

セシリアは背筋が寒くなった。

（もし、直撃していたら……、そうもし直撃してたら、わたくしは間違いなく負けていた）

そして決意する。

二度とあれを撃たせてはいけないと、もし次に撃たれたら……、その時は自分の負けだと。

高々と吹きあがる爆炎に機体を隠し、上空へと一気に移動する。

（こちらのシールドエネルギーは残り5割強。でも、あれだけの威力の攻撃は大量のエネルギーを使うはずですよ）

セシリアは焦る気持ちを抑え作戦を立てる。

（そう考えれば相手も少なからず、いえ大量のエネルギーを消費しているはず。相手に攻撃させないようにわたくしのいつもの戦法を行えば勝てるはずですわ！！）

エネルギー兵器という武器の特性上、攻撃にはエネルギーを消費する。

ブルー・ティアーズがエネルギー兵器しか搭載されていないため、セシリアはその特性を熟知していた。

——ふと感じる漠然とした、なにか大切なことを忘れているような嫌な予感。

それをそれを振り払うように攻撃準備に入る。

ビットで攪乱、隙を作りライフルで狙い撃つ。

中距離射撃型の特性を生かしISの名前の由縁となった特殊ビット兵器「ブルー・ティアーズ」を上手く使った戦法。

勝てるとセシリアは自分に言い聞かせる。

いつものように余裕をにじませた笑みを浮かべ、胸を張り、ライフ

ルを構える。

「さあ、踊りなさい。わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞^{フル}曲を――！」

引き金を引いた。

―― 30分。

セシリアが一方的に攻撃し続けた時間である。

その間サクラは攻撃に移ることすらできなかった。

出来たことと言えばビットを二機やつとのことで落とした程度。

それだけすさまじい猛攻。

しかしその猛攻を受けてもサクラは未だ健在だった。

そう、30分前にセシリアが感じていた漠然とした嫌な予感的中していた。

セシリアは思う。

計算ではもうとっくに戦闘不能になっているはずだった。

無礼な発言をしたこの女に後悔を味あわせているはずだった。

——それでもまだ落ちない。

二機のビットがもう何度目になるだろう、攻撃を仕掛ける。

攪乱のビームを放ち、狙うはサクラの意識の死角。

それをさせんとばかりにサクラはG-01の運動性を生かし、縦横無尽に動き回り隙あらばビットにビームサーベルで斬りかかる。

だがセシリアもビットを操作し、斬撃を回避させる。

——サクラの体勢が泳いだ。

その隙をライフルで狙い撃つ。

しかしその一撃はシールドによって受け止められた。

もう何度目になるだろうその光景。

忌々しいビームをはじく加工がされたシールドによって有効打が与えられない。

ライフルを連射し、戻ってきたビットを再び射出する。

セシリアは焦る。

これが最後のビット射出。

残りエネルギー残量10%、もうビットに回せるエネルギーはない。

ミサイル搭載型のビットはとうの昔に撃ちつくしてしまった。

そう、これが最後の攻撃。

セシリアはもう認めていた。

自分の攻撃をこれほどまで凌ぎきつたこの女はただの無礼者ではなかった。

彼女、サクラ・アナハイムは好敵手だと。

——だからこそ勝ちたい。

二機のビットが最後の隙を作る。

そのままビットは地面へと落ちていく。

もう戻すだけのエネルギーはない。

（落ちなさい！！）

作られた最後の隙、その隙を逃さない。

——シールド阻まれる。

（落ちなさい！！）

——回避される。

（落ちなさい！！）

回避位置をを予測、狙い撃つ。

——シールドに阻まれる。

「落ちなさい！！」

——ついにシールドが破壊される。

「落ちろ！！」

渾身の思いを込め引き金を引く。

——しかし、閃光が発射されることはなかった。

Empty
弾切れ。

残りエネルギー5%、もうライフルに回せるエネルギーも残っていないかった。

光の剣を携えサクラはこちらに突進してくる。

——負けたくない。

セシリアは思う。

ライフルも使えない。

ビットも使えない。

もう何もないのか、自分は負けるのか。

——あつた。

それは最後の希望。

セシリアは大声で叫ぶ。

「インターセプター！！」

最後の剣を向かってくるサクラに突き刺した。

—— エネルギー残量ゼロ。

勝者

—— サクラ・アナハイム。

10話（後書き）

勝者で3日ほど悩みました。

最初はセシリアにするつもりでしたが一夏と戦ったあとクラス代表譲ってしまうのが原作なので、もしサクラに勝ってしまうとその戦いを無視してクラス代表を譲るだろうか？と想着てしまい泣く泣くサクラにしました。

10話 その2（前書き）

まずは投稿期間が一月も空いてしまったことをお詫びします。
リアルが忙しかったうえ、パソコンの故障、買換えが重なり投稿できずにいました。

パソコンの方は新しいものが来たので小説は書けるようになりましたがリアルの方は相変わらず忙しい時期が続きます。

なるべく早く投稿したいとは考えていますが、またこれくらい期間が開いてしまうかもしれません。

その点はご了承ください。

10話 その2

太郎は機体整備におわれていた。

セシリアとの試合のあとアリーナに隣接している整備科がIS整備のため使う施設、「IS整備室」に運び込まれたG-01はほぼ大破と言っているほどボロボロだった。

それだけの激戦であり、結果はまさに紙一重、G-01のエネルギー残量はわずか5%、あと一撃でも多く攻撃を食らっていたら負けていたのはサクラの方だったのである。

むしろ機体だけで見ればボロボロのG-01に対しブルー・ティーズは損傷も軽微で修理といえばビットを取り換えた程度。

いったいどちらが勝者なのか分からなくなるような状態だった。

またG-01は大破クラスの実体ダメージを受けているため修理しなければすぐに試合には参加できない。

そのため先に修理が終わったブルー・ティーズが先に一夏と戦うことになり、先ほど白式がやっと届いたため、いわゆる原作の戦いが今丁度行われているところだった。

（原作の戦い見てえ！！ でもそんな余裕ねー！！）

そう太郎は思う。

通常、公式の行事での試合のときは損傷が激しいことがあるのでア

ナハイム社からメカニックチームが応援に来ることになっている。

ただし今回は公式の行事というわけでないことが響き、メカニックチームの編成が間に合わなかったのである。

そのため、メカニックチームが来ていないのである。

また2年生以上の生徒はこのような行事になると整備科に協力を仰ぎメカニックチームを編成してもらうことが通例となっている。

今回も自分の生徒である整備科の生徒たちに応援を頼むという方法もあったが、そこは専用機ということもあり企業機密の結晶だ。

安易に触らせるわけにはいけないのである。

このようなわけで、太郎はこのG-01の整備を一人でやることになってしまったのだ。

幸いなのは実体ダメージが大きすぎるため、パーツを総取り換えになり、下手な修理より簡単だということとG-01の整備に時間がかかるためサクラと一夏の試合が明日に延期になったことである。

それでも一人で整備するには膨大な作業量であることには変わりがない。

はつきりいつて猫の手も借りたいくらいの作業量である。

（今日は徹夜確定だな……）

そんなことを考えながら太郎は一心不乱に手を動かした。

カタパルトからアリーナへと飛び出し、待っていた白い機体「白式」の前に停止する。

あれだけ大破していた自分の機体だが、今のところ挙動に問題は無い、修理は完璧なようだ。

「機体、大丈夫か？ 昨日、大分壊れていたけど」

織斑 一夏はそう話しかけてくる。

「ええ、大丈夫みたいよ」

「そっか、そりゃ、よかった。それじゃあ、正々堂々よろしくな」

にっこりとさわやかな笑顔を浮かべてそう言う。

サクラはそっけなくよろしくと返した。

サクラは戦略を練っていた。

腕は多分互角が一夏の方が上だろうと推測する。

（昨日の試合を見る限り、セシリアと比べると動きは大分荒い。それでも一次移行していない状態でセシリアの正確な射撃を避けていたのだから、操縦センスは多分私よりも上）

そうサクラは思う。

事実、試合後プライドの高いセシリアが一夏の操縦センスをべた褒めしていたのだ。

彼女が言うからには相当なものだろうとサクラは思う。

（後はセシリアを一撃で倒したあの剣は厄介ね）

そうサクラは考える。

実は昨日のセシリアと一夏の試合はなんと一夏が勝っていたのだ。

つまり、原作とは異なりなんと零落白夜での攻撃を当てていたのがある。

その勝因はサクラとセシリアの試合を見ていたためかセシリアの動きやビットの動きをなんとなく読めており、その結果被弾が原作より少なく済んでいたためである。

（織斑先生のISに搭載されていたワンオフ・アビリティー「零落白夜」のような武器みただけど、まったく同じワンオフ・アビリ

ティーが発現した例はないし、通常ワンオフ・アビリティーが発現するのは第二次移行の後だから「零落白夜」とは思えない)

サクラはそう推測する。

(でもセシリアを一撃で落としたあの威力……、あれ以外の武器を持つていても否定できないけど、とりあえず近づかせないようにするのが今思いつく最善の方法ね)

戦略を立てバスターライフルを構える。

一夏も雪片式型を展開、零落白夜を発動させる。

——試合開始のゴングが、今鳴った。

サクラはすぐさま白式をロックしビームライフル程度まで出力を下げたビームを放とうとする。

しかし、白式はその機動性を存分に生かし、機体をバレルロールさせながら射線軸上から消えた。

そして一瞬で距離を詰める。

(速い!?)

昨日の試合とは段違いの動き。

その予想を超えたスピードに回避が間に合わない。

とつさにシールドを構える。

——
気合一闪

その斬撃を何とかシールドで受け流しマシンキャノンをばらまきながら距離を取ろうとする。

しかし、それを躲しながら最接近。

「ハアアア!!」

さらなる斬撃を繰り出してくる。

サクラも斬撃を回避しながら何とかバスターライフルを撃とうとするがその巨大さゆえの取り回しの悪さが響き、攻撃になかなか移れない。

（これは、もしかしたらいけるかも）

一夏は斬撃を繰り返しながらそう思う。

機体が軽い。

自分の思い通りに動いてくれる。

まるで機体が自分の体と一体になったかのような感覚。

昨日の試合では一瞬しか感じられなかった一次移行による最適化の恩恵を一夏は全身で感じていた。

フェイントやマシンキャノンの牽制を行ってきても、それに軽々と反応し相手についていける。

執拗に張り付き斬撃を繰り返す。

一夏は今、この試合のペースを完全に握っていた。

この一連の攻撃は実は一夏が筭と立てた作戦である。

一夏が一番脅威と考えたのはあのバカげた威力のライフルである。

あれだけは撃たせてはいけないというのは箒との共通認識でもあった。

しかし一夏も箒もサクラの昨日の試合を見ていてその弱点に気づいていた。

そう、ライフル本体の巨大さゆえの取り回しの悪さである。

サクラとセシリアとの試合の中でもセシリアのサクラにぴたりと張り付けたビット攻撃にはバスターライフルでの攻撃ができなかったことをしっかりと見抜いていたのである。

ライフルさえ封じてしまえば脅威はビームサーベルのみ。

これも千冬から聞いた零落白夜の特性によって克服されていた。

零落白夜の特性、つまりエネルギー兵器による攻撃の無効化である。

例えばビームサーベルによって攻撃されても受け止めれば無効化できるうえ、相手がこちらの攻撃を受け止めようものなら問答無用で無効化して一撃を与えられるのである。

そうなればバスターライフルでの攻撃がないビームサーベルを装備した状態はむしろ攻撃のチャンスでしかない。

ちなみにバスターライフルも無効化はできるようだが、千冬の話だとできないことはないが避けた方が楽とのことだ。

まあ、むしろできる千冬が異常なだけであって、剣で飛んでくる銃弾を切る様なものだから無謀ということは一夏にも想像できた。

このことを考慮に入れても、零落白夜の届く近距離に居座ってさえいればこちらの絶対的優位。

マシンキャノンでの攻撃もあるが、昨日の試合を見る限りビットにすら満足にダメージを与えられない威力と精度だ。

当たっても大したダメージは与えられないことは容易に予想できた。後はこちらのシールドエネルギーが切れる前に攻撃を一回でも当てれば勝ちである。

また、どれだけ被弾せずに懷に潜り込めるかが試合の流れを決めるポイントだったが、これもサクラに攻撃される前に潜り込めてしまった。

今のところ作戦はうまく行き過ぎているぐらいであった。

（くっ、しっこい！！）

対するサクラは窮地に落ちいていた。

相手は自分に執拗に張り付き斬撃を繰り返してくる。

サクラはそこから逃れられずにいた。

最初こそ逃れようとフェイントなどを駆使していたが、今ではシールドで受け止めたり、避けたりするのが精いっぱいだった。

「くう!!」

左に回り込まれ、放たれた斬撃を何とかシールドで受け止める。

もうシールドにはヒビが入り始めていた。

ビームサーベルで受け止めるという手もサクラは考えたがあれだけの威力、多分受け止めても押し切られてしまふと考えでずにいた。

マシンキャノンで牽制するも被弾も構わず斬撃を繰り返してくる。

機体を半身ずらして回避、そして離脱しようとするもその動きを読まれ、また斬撃。

はつきり言って攻撃が当たるのは時間の問題だった。

シールドが壊れればもうその時点で負けるだろう。

サクラはそう予測していた。

しかし、避けながら相手の動きの違和感にサクラは気づき始めた。

（少しずつだけど攻撃が単調に、大振りになりはじめている?）

そう少しずつだが攻撃が雑になりはじめてきたのだ。

現にピットで見ていた織斑　千冬はこう言っていたのだ。
浮かれていると。

サクラは攻撃を避けながら一つの策を考案し、そのタイミングを計っていた。

斬撃を見極める。

「くう!!」

そして一つの斬撃を定め回避、そしてわざと体制を崩す。

「もらったぁ!!」

——
「かかった!!」

にやりとほくそ笑む。

とどめを刺そうと大振りになった一撃、それを

——回避する。

「んなあ!？」

冷静な一夏なら見極められただろう罠にまんまと掛かり、大きく体制を崩す。

千載一遇のチャンスをサクラは逃すつもりはなかった。

「はあっ!！」

機体を一回転させ、その勢いで蹴りを放つ。

——衝撃。

一夏の機体が大きく吹き飛ばされる。

その隙に機体をバード形態に変形させる。

そしてフルスロットルで一気に上昇する。

サクラはこの攻撃で勝負を決めるつもりでいた。

たぶん自分の腕では今の一夏にはバスターライフルを連射してもあまり当てることができないだろうと、そしてまた同じように纏わりつかれてしまうとサクラは予測していた。

そして訪れた千載一遇のチャンス。

変形を解除しバスターライフルを最大出力にし一夏をロックする。

一夏もこちらを追ってこようとするも動きが止まった。

サクラとてただ上昇していたわけではない。

太陽を背にして上昇していたのである。

太陽の光によって目がくらみ動きが止まるのをサクラは狙ったのだ。

このチャンスを逃すつもりはない。

バスターライフルの引き金を引いた。

——一夏は光の柱に飲み込まれていった。

（くそっ、油断した！！）

蹴り飛ばされた一夏は心の中で悪態をついた。

よくよく考えてみればさっきの行動は罠だと分かったはずのものだった。

作戦がうまく行き過ぎていたせいで、完全に浮かっていた。

セシリアとの試合の時も同じようにピンチに陥ったにもかかわらず、また同じことをしてしまった自分に一夏は腹が立った。

そしてすぐさま、そんなことを考えるのは後だと一夏は気持ちを切り替える。

機体の体勢をすぐさま立て直したサクラへと突撃しようとする。

だが目の前でサクラの機体が一瞬光に包まれたかと思うと形が変わっていたのだ。

（へ、変形したあ！？）

一夏は一瞬呆気にとられてしまった。

変形するISなんてものは見たこともないし、聞いたこともなかったからである。

呆気にとられている一夏をしり目に、まるでロケットのごとき加速力G・01は上昇する。

(っ!!! まずい!!!)

一夏もそれを追おうと上方に機体を向ける。

「くっっ!!!」

光が目を焼く。

(しまった、太陽を背にして)

そのまぶしさによって一夏は動きを止めてしまった。

即座に白式のハイパーセンサーが作動し光量を調節する。

——警告音。

一夏の目に映ったもの、それは巨大な光の柱だった。

(まずい、回避は……、ダメだ、間に合わない!!!)

一夏は負けを覚悟した。

しかし、一夏はこの窮地にあることを思い出した。

そう零落白夜のエネルギー武器の無効化という特性である。

もう一夏に考えている暇はなかった。

「こなくそお!!」

向かってきた巨大な光の柱に零落白夜を叩きつける。

光の柱は零落白夜にあたり

——真っ二つに切断された。

「!んのおおおおお!!」

その時のことを一夏はあまりよく覚えていないと語る。

自身に降り注ぐ巨大な光の柱を真つ二つに切り裂きながら白式は突き進んだ。

「……嘘」

そして、ビームを叩き切られるという信じられない光景を見せつけられ唖然としているサクラをその目に零落白夜の刃を

――振り下ろした。

「というわけでっ！ 織斑くんクラス代表決定おめでとっ！」

ぱん、ぱんぱーん。

クラッカーが乱射される。

夕食後の自由時間、寮の食堂に一組のメンバー全員集まり『織斑―夏クラス代表就任パーティー』なるものが開催されていた。

……というか明らかに2組の生徒が紛れ込んでいるというか、30人以上いるというかクラスの人数超えていないかしら？

「あのおきはおしかつたねえー、さくらん」

いつの間にか本音とさゆかと癒子といういつもの三人組が隣に来ていた。

「あなたたち、織斑君の方はいいの？」

「まーね、織斑くんも今取材受けてるみたいだし」

癒子がちよんちよんと隣を指さしながら答える。

ふと隣に座っている一夏の方を見ると新聞部なるものに絡まっていた。

気づかなかつたけどまあいいわ。

巻き込まれると厄介そうだし。

「いやー、ホントにあの時はおしかつたねえ、まさかあのこん太ビームを真つ二つに切るなんて、見てるこっちもびっくりしちゃった」

うんうん、すごかったねーと本音とさゆかはうなづきあっていた。

「こつちも驚いたわよ。……まあ、でも魔は聖によって討たれる定め、エクスカリバー聖剣を持つ彼に討たれるのは必然だったのよ」

「はいはい、サクラの厨二節も変わらないねえ」

癒子はいつものように厨二病厨二病と返した。

「それよりも、試合の後の織斑先生の方がこの魔の力を持つ私ですら気味が悪かったわ」

「あれは幻よ、そう幻なのよ!!」

癒子がこの世の終わりを見たような表情で言う。

そう試合の後の織斑先生は、弟が実力でクラス代表を勝ち取ったことがうれしかったのか、かなり機嫌がよかった。

試合後の朝のホームルームに満面の笑みを浮かべ教室に入ってきたときは本気で背筋が寒くなった。

その日はいつもなら問答無用で降ってくる拳骨や、厳しい言葉もない。

そこには弟の姿を見るとでれっと笑みを浮かべるブラコン姉がいただけだった。

弟である一夏ですら千冬姉が壊れた――！と半狂乱になっていたのは印象に残っている。

鬼教官、織斑千冬の姿はどこにもなくその日は偽物説や、宇宙人に改造された説、世界の終り説までささやかれたほどだった。

今では元の織斑先生に戻っているものの一組の多くの生徒の中でその日はなかったことにされている。

「なにやら面白そうな話してるけど、サクラちゃんも写真撮るから立って織斑ちゃんとセシリアちゃんと握手して頂戴」

いつの間にか隣に来ていた新聞部の人がそういう。

写真？ めんどくさいわね。

「あーあー、心配しなくても写真はちゃんとあげるから」

そんな心配していないわよ。

篠ノ之 箒もこっちを睨み付けないでちょうだい。

そこの新聞部いつてくれないかしら？

「それじゃあ撮るよー。サクラちゃんもセシリアちゃんももうちよつと寄って、寄って」

なにか、セシリアがどこなくなってくれしそうね。

まあ、一目ぼれもあるから何とも言えないけれど、ちよろすぎじゃないかしら？

「 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「え？ えつと……2？」

「 74.375 よ」

「おつ、すごい、サクラちゃん当たりー」

パシャッとデジカメのシャッターが切られた。

なんなのかしら、本当に？

いつの間にか全員周りに集結しているし……。

まあ、それなりに楽しかったから良しとしましょうか。

10話 その2（後書き）

主人公、太郎君の出番があまりない…。

主人公（空気）になりそうな今日この頃。

そろそろ太郎君もISに乗せることもありかなあと思い始めてきました。

オリジナルISの種類も増やしたいところですし……。

どうしようかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8973t/>

IS インフィニット・ストラトス の世界で整備士することになりました。

2011年8月8日21時38分発行